

玉璫の編年

坂川 幸祐*

はじめに

長剣は、漢代中国の文化を代表する考古遺物の一つといえよう。中国社会において長剣は秦代以降官民間問わず広く用いられた近接戦闘武器であり〔柿沼2011〕、河西漢簡にも大刀とともに長剣を携行した通行人の記述が数多く記録されている。漢代の墳墓からも数多くの鉄製長剣が出土しており、その普及度を測り知ることができる。そして漢代の長剣は当該期の中国領外にも搬出されたことが確認されており、その影響を受けた長剣やそれを描いた絵画が、ユーラシアの広い範囲から報告されている〔Trousdale 1975〕。この長剣拡散のプロセスを把握することは、前1千年紀末以降の汎ユーラシア的な交流とその影響を評価する上で重要な課題である。

しかし、漢代の長剣そのものの型式編年は難しい。鉄製長剣は多くの場合鏽に覆われており、最も形態的特徴を観察しやすい関も別素材の剣格に隠されてしまっていることがほとんどで、有効な属性が長さに限られる。また剣装具のうち、柄頭の剣首と鞘尻の玃は長剣副葬時に取り外すことが多く、長剣の年代を決める要素としては難がある。取り外すことのない剣格は、青銅製の事例は変化に乏しく、玉製の事例は出土数がわずかである。

そのようななかで注目すべきなのが玉璫である。玉璫は長剣鞘の中段に取り付けられる帯取用の装具であり、すべての漢代長剣に伴うわけではないものの、剣首や玃と比べて圧倒的に出土数が多い。また単独で出土する事例もあるものの、有機質の鞘が劣化した鉄製長剣との対応関係を確認しやすい事例がほとんどである。何よりも、以下に述べるように編

年に有意と考えられる属性が豊富である。中国境外の長剣との関係を探る上でも、璫は重要な指標となるだろう。

本稿ではそのような玉璫の編年について、発掘出土事例の属性分析をもとに編年を試行する。これにより、漢代鉄製長剣について、より詳細な製作・流通状況を把握することができるようになるだろう。

1. 研究の現状と課題

数ある漢代玉器のなかにあつて、璫の使用方法に関する復元的研究は長い研究史がある〔呂1092、郭1932、朝鮮総督府編1927、梅原1938、林1973、Trousdale 1975、孫機1985〕。ただしそのなかでは璫そのものが編年研究の対象となることは少なかった。中国では、陝西省の玉器集成図録の中で璫が取り上げられている〔劉編著2009〕のをはじめ、玉器全体の集成研究のなかで玉器が取り上げられていることが多い。そこでは紋様の種類や彫刻技術に焦点が当てられており、璫そのものの基礎的な分類研究はおこなわれていない。

このような状況下で璫の網羅的な研究をおこなった労作として、トゥールスデイルの集成研究が挙げられる〔Trousdale 1975〕。彼は当時知られていたコレクション資料や発掘出土資料を博搜し、紋様による系列を設定、戦国時代から後漢時代に至る各時期の璫について、各種紋様と側面形の組成を把握することによってその変遷を試みた。そのうえで中国国外の璫や関係資料についても集成と様相把握を試みたため、中国だけではなく後述するロシア・ヴォルガナ墳墓の研究〔Gonthier, Kostov, Strack

*SAKAGAWA Kosuke 島根大学法文学部講師

2014] など、広い範囲で今日まで引用されている。

しかしトゥルースデイルの研究が刊行された1975年以降、中国では漢代墳墓の発掘報告がそれまでとは比べ物にならないほどに増加している。トゥルースデイルは各段階の資料の不足を埋めるためにコレクション資料を引用しており、現在の豊富な出土資料を用いた再検討が必要であろう。また、トゥルースデイルの編年研究では、各種紋様についていくつかの分類がおこなわれているものの、紋様同士の派生関係や、側面図にみられる各種属性の前後関係が検討されていない。したがって、各事例同士の関係が判然としないままになっている。

本稿ではこれを踏まえ、発掘調査によって報告された玉璫を集成し、それについて紋様や各部位の分類による属性分析をおこなう。そのうえで各属性間の派生関係を検討し、総体的な玉璫の編年を確立する。なお、遺跡から出土する璫は軟玉製のほか、水晶製やメノウ製、ガラス製、そして木製や象牙製などが知られている。そのなかで大多数を占めるのは軟玉製をはじめとする、硬質素材を彫刻して作られるものであり、これらの製品は素材が異なっているにもかかわらず製作技法が通底していると考えられる。したがって本稿ではそのほかの素材の製品も視野にいれつつも、主に軟玉製、メノウ製、水晶製の製品を取り扱う。

2. 玉璫の属性分析

ここでは、玉璫の形態と紋様をそれぞれ分類し、その変遷について分析する。トゥルースデイルが指摘するように、玉璫には鈕孔から長い鉤部が一方に伸びるものと、短い鉤部が前後に伸びる鉤部を伴わないものがある。このうち前者を甲類（トゥルースデイル分類 Form I）、後者を乙類（トゥルースデイル分類 Form II）とする。以下、玉璫の形態に関する分類項目は図1を参照されたい。

2-1. 玉璫の形態的分析

甲類については、短鉤部と長鉤部の形態が多様性に富み、編年研究に有効であることが予想される。短鉤部、長鉤部の形態は、それぞれ以下のように分類される。

○短鉤部

0形：短鉤部が発達せず、表面から鈕孔部にかけて施文面が連続する。

1形：短鉤部が短くのびる。端部は半月形を呈し、短鉤部表面と裏面が角をなす。

2形：短鉤部が短くのびる。端部にかけて厚みが減じてゆくが、短鉤部表面と裏面は角をなさず、端面を形成する。

3形：短鉤部がやや長くのびる。短鉤部の表面と裏面は平行になり、端部で大きな蒲鉾形の突起を形成する。

4形：短鉤部がやや長くのびる。短鉤部の表面と裏面は平行になり、端部は斜めに面取りする。端面の下端にわずかな突起を形成する。

5形：短鉤部がやや長くのびる。端部にかけて厚みがわずかに増してゆき、端部はやや斜めに面取りする。

6形：短鉤部がやや長くのびる。端部付近で巻き込みながら厚みを減じる。

7形：短鉤部がやや長くのびる。厚みを保ちながら端部付近で巻き込む。

8形：短鉤部がやや長くのびる。端部付近で裏面に小さな巻き込み状ないし瘤状の突起を形成する。

○長鉤部

n形：長鉤部が短くのびる。端部は半月形を呈し、長鉤部表面と裏面が角をなす。

i形：長鉤部が長く下垂するようにのびる。下端にかえしはとみなない。

ii形：長鉤部が長く湾曲するようにのびる。下端に大きなかえしを形成する。かえしの端面は水平になる。

iii形：長鉤部が長く水平にのびる。長鉤部の表面と

表 1 本稿が対象とする王璵一覧

No.	出土遺構	長鈎	短鈎	断面	形態	紋様大別	紋様小別	年代	備考	参考文献
1	侯馬西郭東周祭祀遺址	n	0		甲	卷蟬		0	春秋後期	山西省文物考古研究所侯馬工作站 2003
2	大原晋国趙卿墓	n	0		甲	卷蟬		0	春秋後期	山西省考古研究所ほか 1996
3	陝東後川村 2040 号墓	n	0		甲	卷蟬?		0	長鈎部を別づくりにして接合	中国社会科学院考古研究所編著 1994
4	洛陽中州路 2717 号墓	n	0		甲	卷蟬		0	戰国時代	中国科学院考古研究所編著 1959a
5	洛陽唐宮路小字 C1M5560	i	0		甲	卷蟬		0	戰国時代	洛陽市文物工作隊 2004
6	長沙楚墓 167 号墓	n	0		甲	卷蟬		0	戰国中期	湖南省博物館ほか 2000
7	長沙楚墓 1065 号墓	ii	1		甲	縱横	2?	0	戰国後期	湖南省博物館ほか 2000
8	世家星城 189 号墓	i	1		甲	斜向	2	0	秦代	西安市文物保護考古所 2004
9	白鶴洲 60 号墓	不明	1		甲	斜向	2	0	報告書に依拠。戰国末から秦	廈門大学歴史与文化遺産学院ほか 2022
10	白鶴洲 585 号墓				乙-1	斜向?	2	0	戰国中期	安徽省文物考古研究所・六安市文物管理局 2012
11	潜山彭嶺 26 号墓	不明	4		甲	縱横	2?	1	方孔がない特殊例（明器?）	安徽省文物考古研究所・潜山県文物管理所 2006
12	潜山彭嶺 28 号墓	不明	不明		甲	縱横	1	1	側面不明	安徽省文物考古研究所・潜山県文物管理所 2006
13	徐州劉執墓	i	1		甲	斜向	1	1	蟬紋	徐州博物館 1997
14	徐州劉執墓	i	1		甲	特殊例		1	縦紋に近い	徐州博物館 1997
15	獅子山漢墓	i	6		甲	蟬紋	1	1	特殊な平面形をとる。劉鄩（峇）墓か?	中国国家博物館・徐州博物館編 2005
16	孔家坡 8 号墓	iii	3		甲	斜向	1?	1	木剣に伴う	湖南省文物考古研究所・随州市考古隊 2006
17	蕭皇漢墓 XPM100	不明	5?		甲	縱横	1	1	破損	安徽省文物考古研究所・安徽省蕭皇漢博物館編 2008
18	西安北郊長慶油田総部三期工程 31 号墓				乙-2	縱横	2	1	横相不明、図録に依拠	劉編著 2009
19	西安北郊頂蓋生活園 71 号墓	i	1		甲	縱横	1	1	横相不明、図録に依拠	劉編著 2009
20	漢高祖長陵陪葬墓 96 号墓	i	5		甲	斜向	3	1	横相不明、図録に依拠	劉編著 2009
21	渭城底張漢漢墓	ii	5		甲	縱横	2	1	横相不明、図録に依拠、破損	劉編著 2009
22	渭城底張漢漢墓	ii	6		甲	縱横	3	1	横相不明、図録に依拠	劉編著 2009
23	馬王堆 3 号墳				乙-1	無紋		1	象牙製	湖南省博物館・湖南省文物考古研究所編著 2004
24	石匣子 68 号墓	i	1		甲	無紋		1	報告書に依拠	重慶師範大学歴史と社会学院ほか 2014
25	胡家草場墓地 12 号墓	iii	5		甲	縱横	2	1	報告書に依拠、文帝期?	荆州市博物館 2020
26	火電廠 21 号墓	不明	6		甲	不明		1?	弦紋鏡が共存しているが断面図不明	三門峽市文物工作隊 1996
27	成都東北郊西漢墓群 30 号墓	ii	5		甲	斜向	1	1?	雷地紋鏡や桃氏剣などを伴う	頼 1981
28	後樓山西漢墓	ii	1		甲	斜向	1	1?		徐州博物館 1993
29	衡陽市第四類	vi	6		甲	縱横		1~2		衡陽市博物館 1984
30	陝東後川村 300 号墓	i	1		甲	無紋		1~2	半面で判断	中国社会科学院考古研究所編著 1994
31	連志村 13 号墓	ii	5		甲	蟬紋	1	1~2	半面錢から判断	中国社会科学院考古所唐城隊 1991
32	広州漢墓 1068 号墓	i	2		甲	縱横	1?	1~2		中国社会科学院考古研究所ほか編 1981
33	広州漢墓 1095 号墓	ii	6		甲	無紋		1~2		中国社会科学院考古研究所ほか編 1981
34	広州漢墓 1095 号墓	i	5?		甲	蟬紋?		1~2	破損しているため紋様の詳細不明	中国社会科学院考古研究所ほか編 1981
35	広州漢墓 1100 号墓	i	1		甲	斜向	1	1~2		中国社会科学院考古研究所ほか編 1981
36	広州漢墓 1103 号墓	ii	6		甲	縱横	1	1~2	拓本が悪く紋様不鮮明	中国社会科学院考古研究所ほか編 1981
37	広州漢墓 1175 号墓	ii	6		甲	縱横	2	2	草葉紋鏡	中国社会科学院考古研究所ほか編 1981
38	広州漢墓 1175 号墓				乙-2	特殊例		2	断面以外の紋様不明。雲紋の走りか?	中国社会科学院考古研究所ほか編 1981
39	広州漢墓 1175 号墓	iii	5		甲	斜向	1	2		中国社会科学院考古研究所ほか編 1981
40	広州漢墓 1175 号墓	ii	4		甲	縱横	2	2		中国社会科学院考古研究所ほか編 1981
41	東陽小壩山 1 号墓	iv?	2		甲	斜向	4	2		肝胎県博物館 2004
42	荆寺二村 1 号墓	vi	不明		甲	斜向	2	2	半面と鏡から判断	西安市文物保護考古所 2009
43	双乳山 1 号墓	ii	7		甲	縱横	2	2	前 87?	王 2005
44	双乳山 1 号墓	i	6		甲	斜向	1	2	前 87?	王 2005
45	双乳山 1 号墓	iv	6		甲	縱横	3	2	前 87?	王 2005
46	南越王墓主棺	ii	6		甲	特殊例		2	狼などを浮彫で表現	広州市文物管理委员会ほか編著 1991
47	南越王墓西耳	ii	6		甲	縱横	3	2		広州市文物管理委员会ほか編著 1991
48	南越王墓西耳	v	6		甲	蟬紋	1	2	線刻で表現	広州市文物管理委员会ほか編著 1991
49	南越王墓西耳	v	2		甲	縱横	2	2		広州市文物管理委员会ほか編著 1991

50	牛王廟128号墓		ii	6		甲	斜向	1	2	写真と図面の紋様が異なる	南陽市文物考古研究所編著 2011
51	溝成漢墓1号墓		ii	6		甲	斜向	3	2		中国社会科学院考古研究所編著 1980
52	溝成漢墓1号墓		ii	6		甲	縦横	1	2		中国社会科学院考古研究所編著 1980
53	溝成漢墓1号墓		ii	4		甲	蟻紋	1	2		中国社会科学院考古研究所編著 1980
54	草林山11号墓		v	6		甲	蟻紋	1	2		黄陂市博物館ほか編著 2000
55	大孤山2号墓					乙-2	特殊	2	2		徐州市博物館 2009
56	保安山2号墓・1号陪葬坑		i	6		甲	縦横	3	2		河南省商丘市文物管理委員会ほか主編 2001
57	保安山2号墓・1号陪葬坑		不明	不明		甲	斜向	1	2		河南省商丘市文物管理委員会ほか主編 2001
58	陽陵北道陪葬15号墓		ii	6	IV	甲	雲紋	4	2		劉編著 2009
59	陽陵北道陪葬17号墓		ii	4?		甲	縦横	3	2		劉編著 2009
60	陽陵北道陪葬75号墓		ii	4	I	甲	斜向	1	2		劉編著 2009
61	陽陵北道陪葬363号墓		ii	6		甲	蟻紋	1	2		劉編著 2009
62	陽陵北道陪葬363号墓		ii	6		甲	斜向	1	2		劉編著 2009
63	陽陵北道陪葬678号墓		ii	3		甲	蟻紋	1	2		劉編著 2009
64	陽陵陪葬墓園		ii	6		甲	斜向	2	2?		劉編著 2009
65	陽陵陪葬墓園					乙-1	無紋		2?		劉編著 2009
66	大雲山江都王陵東区17号陪葬墓		iv	6		甲	縦横	2	2?		南京博物院・盱眙県文広新局 2013
67	南陽一中412号墓		ii	6		甲	蟻紋	1	2?		南陽市文物考古研究所編著 2012
68	郭杜鎮鄧店西漢中期墓		ii	6		甲	蟻紋	1	2?		劉編著 2009
69	流水鄉流水村漢墓		iv	6	II	甲	雲紋	2	2~3		劉編著 2009
70	廬江10号墓		vi	5		甲	無紋		2~3		安徽省文物考古研究所編著 2013
71	淄博市臨淄区国家村16号墓		ii	4?		甲	縦横	3	2~3		山東淄博市臨淄区文物局 2010
72	海昏侯劉賀墓		ii	6		甲	蟻紋	1	3		南昌漢代海昏侯国通址博物館編著 2020
73	海昏侯劉賀墓		iv	4	I	甲	斜向	渦	3		南昌漢代海昏侯国通址博物館編著 2020
74	海昏侯劉賀墓		ii	7		甲	蟻紋	不明	3		南昌漢代海昏侯国通址博物館編著 2020
75	海昏侯劉賀墓		ii	6		甲	蟻紋	1	3		南昌漢代海昏侯国通址博物館編著 2020
76	海昏侯劉賀墓		ii	6	II	甲	雲紋	2	3		南昌漢代海昏侯国通址博物館編著 2020
77	海昏侯劉賀墓		ii	6	II	甲	雲紋	2	3		南昌漢代海昏侯国通址博物館編著 2020
78	海昏侯劉賀墓		iii?	6	II	甲	雲紋	2	3		徐主編 2024
79	海昏侯劉賀墓		i?	1?		甲	縦横	2	3		徐主編 2024
80	海昏侯劉賀墓		ii	5		甲	無紋		3		南昌漢代海昏侯国通址博物館編著 2020
81	海昏侯劉賀墓					乙-3	無紋		3		南昌漢代海昏侯国通址博物館編著 2020
82	海昏侯劉賀墓					乙-2	無紋		3		南昌漢代海昏侯国通址博物館編著 2020
83	海昏侯劉賀墓					乙-2	縦横	2	3		徐主編 2024
84	拖竜山3号墓		ii	7?	II	甲	斜向	2	3		徐州博物館 2010
85	豐泰墓地365号墓		ii	6	II	甲	雲紋	2	3		河南省南陽市文物考古研究所・武官大学歴史学考古系編著 2011
86	姜屯157号墓		iv	5		甲	縦横	4	3		遼寧省文物考古研究所編著 2013
87	洛陽西郊3203号墓		不明	不明	I	甲	縦横	2	3		中国科学院考古研究所洛陽発掘隊 1963
88	邢台市北陳村		iv	6		甲	無紋		3		中国科学考古研究所編著 1980
89	陽高古城堡12号墓					乙-1	縦横		3?		河北省文物管理処 1980
90	陽高古城堡12号墓		iv	6		甲	無紋		3?		東方考古学会編著 1990
91	陽陵陪葬墓園		ii	6		甲	斜向	2	3?		東方考古学会編著 1990
92	西安北郊白灘村千戸村		ii	6		甲	蟻紋	2	3?		陝西省考古研究所編 2001
93	渭城区化社村		不明	不明	II	甲	雲紋	2	3?		劉編著 2009
94	拖竜山4号墓		不明	不明		甲	縦横	2	3~4		徐州博物館 2010
95	拖竜山4号墓		v	6?		甲	縦横の刻線あり、図面が複雑	3	3~4		徐州博物館 2010
96	長沙後湖報告240号墓		iv	7	III	甲	雲紋	3	3~4		中国科学考古研究所編著 1957
97	連志村11号墓		不明	7	III?	甲	不明		3~4		中国社会科学院考古研究所唐城隊 1991
98	九龍山20号墓		v?	不明		甲	縦横	1	4		遼寧省文物考古研究所編著 2012
99	姚莊101号墓					乙-1	無紋		4		揚州博物館 1988
100	土山屯4号村土147号墓		不明	不明	IV	甲	雲紋	4	4		青島市文物保護考古研究所・黄島区博物館 2019
101	梁山柏木山漢墓		不明	不明		甲	蟻紋	2	4		蘇 1964
102	西安市電信局第二長途通信大樓110号墓		v	8	III	甲	雲紋	3	4		西安市文物保護研究所ほか編著 2004

103	西安市電局第二長途通信大樓 160 号墓	不明	8?		甲	縦線	3	4	メノウ製、破損。異体銘帯鏡 V-VI 式	西安市文物保護研究所ほか編著 2004
104	西安市南村西北医療設備廠 1 号墓	i	8		甲	縦線	3	4	メノウ製。異体銘帯鏡 V-VI 式	西安市文物保護研究所ほか編著 2004
105	浅井頭漢墓	ii	3	I	甲	斜向	1?	4	獸面紋あり。報告書に依拠、図面が粗雑	洛陽市第二文物工作隊 1993
106	海昏侯劉宋園墓	ii	7		甲	縦紋	不明	4	半浮彫、写真不鮮明	南昌漢代海昏侯園遺址博物館編著 2020
107	海昏侯劉宋園墓	ii	7		甲	縦紋	不明	4	半浮彫、写真不鮮明	南昌漢代海昏侯園遺址博物館編著 2020
108	甘泉県西漢晩期墓	v	7		甲	無紋		4	メノウ製、様相不明	劉編著 2009
109	東龍山西漢晩期墓	ii	6		甲	縦紋	1	4	様相不明	劉編著 2009
110	西安東郊六樹工地西漢晩期墓 110 号墓			乙-2		縦紋	2	4	様相不明、尾がはみ出す	劉編著 2009
111	西安東郊六樹工地西漢晩期墓 110 号墓	iv	8?	III	甲	雲紋	3	4	様相不明	劉編著 2009
112	新宝磚廠西漢晩期墓	ii	6		甲	縦横	1	4	様相不明、図録に依拠	劉編著 2009
113	新宝磚廠西漢晩期墓	i	2		乙	雲紋	不明	4	様相不明、図録に依拠、劣化が激しく紋様不鮮明	劉編著 2009
114	阿房宮鄠北何村	iv	7		甲	縦紋	2	4	様相不明、図録に依拠	劉編著 2009
115	西石羊 80 号墓	ii	6		甲	斜向	2	4	報告書に依拠	陝西省考古研究所編著 2020
116	湖南永州市劉張墓	iv	6	II	甲	雲紋	2	4	竜紋	零陵地区文物工作隊 1990
117	廬江 44 号墓	vi	6		甲	無紋		4	漢鏡IV期	安徽省文物考古研究所編著 2013
118	合浦県母娘鎮 5 号墓	ii	6	III	甲	斜向	1	4	単独出土。獸面紋は追刻か？報告書に依拠	広西合浦県博物館 2007
119	沂水水匯村山漢墓	不明	不明		甲	縦横	1	4?	漢鏡IV期に下る可能性がある鏡が出土。鉄剣を伴わず	沂水県文物管理站 1985
120	郿城漢墓 SJM63	i	1	乙-3?	甲	縦紋	不明	4~5	劣化が激しく紋様細別不可	陝西省考古研究院・楊凌区文物管理所 2018
121	宮城子 2003M76	iv?	8		甲	縦紋	2	4~5	蠅紋を伴うヒレ状裝飾あり	大連市文物考古研究所・大連宮城子漢代墓地工作隊 2019
122	石殿里 200 号墳	v	8	IV	甲	雲紋	4	4~5	高久 1993 に依拠	楽浪漢墓刊行会 1979
123	石殿里 200 号墳	ii	2	IV	乙-2	雲紋	4	4~5	高久 1993 に依拠	楽浪漢墓刊行会 1979
124	丁家皂廬 4 号墓	ii	4		甲	縦横	2	4~5	大泉五十を伴う。単独出土	山東省文物考古研究所編著 2020
125	東陽 4 号墓			乙-2	甲	縦紋	2	4~5	大泉五十を伴う	南京博物院 1979
126	新峰墓地 10 号墓	v	8		甲	蠅紋?	不明	5	メノウ製。貨泉を伴う	許昌市文物工作隊 2010
127	朱倉村 683 号墓墓園	v	8		甲	無紋		5	洛陽市文物考古研究院・洛陽市師範學院歴史文化學院 2022	
128	石殿里 260 号墳	ii	8	IV	甲	雲紋	4	5	朝鮮古跡研究会編著 1934	洛陽市文物考古研究院・洛陽市師範學院歴史文化學院 2022
129	東陽 30 号墓			乙-1?	甲	無紋		5	メノウ製。環頭大刀に伴う	朝鮮古跡研究会編著 1934
130	姚莊 102 号墓	不明	不明	IV	甲	雲紋	4	5	拓本のみ	南京博物院・盱眙県博物館 2013
131	西北有色金属研究院 13 号墓	i	2	V	乙-3	雲紋	5	5	大泉五十。貨泉を伴う	揚州博物館 2000
132	資興墓地 204 号墓	不明	8		甲	縦紋	不明	5	破損が激しい	西安市文物保護研究所ほか編著 2009
133	塘山 3 号墓	ii	6		甲	縦紋	2	5	浮彫	湖南省博物館 1984
134	馬家塚子漢墓	i	8		甲	雲紋	5	5		江西省博物館 1981
135	甘泉老史陵漢墓	不明	6?		甲	雲紋	不明	5	写真・図面不鮮明。メノウ製	山東省青州市博物館 2007
136	定県 43 号墓	不明	不明		甲	雲紋	不明	5	紋様写真のみ、不鮮明	揚州博物館 1991
137	石鼓墓地 113 号墓	ii	7		甲	無紋	5	5	紋様写真のみ、不鮮明	定県博物館 1973
138	上孫家寨 59 号墓	i	2	V	乙-3	雲紋	5	5	明帝期の五銖銭出土と報告。白玉製	山東大學歴史文化學院・山東省文物考古研究院 2024
139	上孫家寨乙 1 号墓	i	2	V	乙-2	雲紋	5	5	報告書の年代に依拠	山東大學歴史文化學院・山東省文物考古研究院 2024
140	貴家官山 8 号墓	v	8	IV	甲	雲紋	4	5	貨泉出土	青海省文物考古研究所 1993
141	洛陽姚溝漢墓 1039 号墓	i	2	V	乙-2	雲紋	5	5	報告書の年代に依拠	青海省文物考古研究所 1993
142	孟津州里鋪 1 号墓	ii	8		甲	縦紋	2	5	半浮彫。三国まで下る可能性	四川大學考古文博學院・成都文物考古研究院 2024
143	石殿里 9 号墳	ii	8	IV	甲	雲紋	4	5	高久 1993 に依拠	中国科学院考古研究所洛陽秦漢隊 1963
144	金嶺鎮 1 号墓	v	8	V	甲	雲紋	5	5	後漢書王墓か(劉石?)	中国科学院考古研究所洛陽秦漢隊 1963
145	洗硯池 1 号墓西	v	8	V	甲	雲紋	5	5	西晉、長安部成堆	中国科学院考古研究所洛陽秦漢隊 1963
146	丹徒葛村 1 号墓	ii	8	V	甲	雲紋	5	5	三国時代。写真不鮮明で紋様不明	京大文学部考古学教室 1950
147	常曹山 2 号墓	v?	8?		甲	縦紋	不明	5	六朝。図面不鮮明	山東省文物考古研究所・臨沂市文化広電新聞出版局編著 2016
148	常曹山 2 号墓	不明	不明		甲	雲紋	4	5	六朝。拓本のみ、古物を再獲得?	鎮江博物館 1984
149	仙鶴觀 6 号墓	ii	8		甲	縦紋	2	5	東晉。玉具剣に伴う	南京市博物館・南京市玄武区文化局 1998
150	桂花坪 1 号墓	v	8	不明	甲	雲紋	5	5	東晉。俑とともに単独で出土	南京市博物館・南京市玄武区文化局 1998
151	洛陽西郊漢墓 3247 号墓	ii	不明		甲	斜向	1	5?	写真不鮮明。年代の判断材料不足	南京市博物館 2001
152	洛陽西郊漢墓 6002 号墓	ii	6	III	甲	雲紋	3	5?	獸面は古い?年代の判断材料不足	長沙市文物考古研究所 2024
153	洛陽西郊漢墓 9002 号墓	vi?	不明	II	甲	雲紋	2	5?	特殊例?年代の判断材料不足	中国科学院考古研究所洛陽秦漢隊 1963
154	西安北郊客運北站 9 号墓	v	8	V	甲	雲紋	5	不明	図録は武昭期とするが紋様はより後出するもの。要検討	中国科学院考古研究所洛陽秦漢隊 1963

表2 青銅・ガラスなど可塑性素材の瓏一覧

No.	出土遺構	長鉤	短鉤	獣面	形態	紋様大別	紋様小別	年代	備考	参考文献
1	長沙楚墓 1131 号墓	3	3		甲	縦列		0	戦国後期。ガラス製	湖南省博物館ほか 2000
2	長沙楚墓 599 号墓	3	3	特殊	甲	縦列	2	0	戦国後期。ガラス製、特殊な獣面紋をとまなう	湖南省博物館ほか 2000
3	長沙楚墓 894 号墓	3	3	特殊	甲	縦列		0	戦国後期。ガラス製、特殊な獣面紋をとまなう	湖南省博物館ほか 2000
4	長沙楚墓 1458 号墓	1	2		甲	蟻紋	特殊	0	戦国後期。ガラス製、単独の蟻紋	湖南省博物館ほか 2000
5	長沙楚墓 1063 号墓	3	3		甲	蟻紋	特殊	0	戦国後期？ガラス製、単独の蟻紋	湖南省博物館ほか 2000
6	苗圃山 AM39	直線	直線		甲	蟻紋	特殊	0	戦国中後期。ガラス製	衡陽市博物館 1984
7	秦始皇一号兵马俑坑 T1G3	1	2		甲	無紋		0	銅製	陝西省考古研究所・始皇陵秦俑坑考古発掘隊 1988
8	廬江 10 号墓	6	1		甲	無紋		2~3	2 に遡る可能性あり	安徽省文物考古研究所編著 2013
9	安子溝 4 号墓	欠	6		甲	縦線	2	4	破損が激しい、ガラス製	山東省文物考古研究所編著 2020
10	廬江 109 号墓	直線	直線		甲	無紋		4	青銅製。漢鏡Ⅳ期	安徽省文物考古研究所編著 2013
11	廬江 113 号墓	直線	直線		甲	無紋		4	青銅製。漢鏡Ⅳ期	安徽省文物考古研究所編著 2013
12	李楼 1 号墓	i	8		甲	無紋		5	青銅製。後漢	安徽省文物考古研究所・淮北市博物館 2007

裏面は平行になり、端部で山形の突起を形成する。
iv 形：長鉤部が長く湾曲するようにのびる。下端に大きなかえしを形成する。かえしの端面は斜めになる。

v 形：長鉤部が長く湾曲するようにのびる。下端にかえしを形成するが、長鉤部裏面の反りは小さくなる。かえしの端面は水平になる。

vi 形：長鉤部が長く湾曲するようにのびる。端部は巻き込み瘤状になる。

2-2. 紋様の分類

紋様についてはトゥルースデイルの分類を参考にしつつ、以下のように分類する（図 2）。

○巻蟻紋

水滴形の粒紋が、縦横に規則正しく配置される紋様である。トゥルースデイル分類の Grain Class の一部にあたる。

○縦横列粒紋群（以下縦横紋）

小さな粒上の突起が、縦横に規則正しく配置される紋様である。単純に粒紋のみで構成されるもの（縦横-1）、粒同士を刻線でつなぐことにより階段状の紋様を形成するもの（縦横-2）、同様に粒同士を刻線でつなぐことにより四角形を複数配置するもの（縦横-3）、縦横の幅広の凹線で四角形の隆起を作

り出して代替するもの（縦横-4）などがある。トゥルースデイル分類の Grain Class の一部にあたる。

○斜向列粒紋群（以下斜向紋）

小さな粒上の突起が、斜め方向に規則正しく配置される紋様である。単純に粒紋のみで構成されるもの（斜向-1）、粒に渦状の刻線をとまなうもの（斜向-2）、粒の間に斜め方向の刻線をとまなうもの（斜向-3）、斜めの幅広の凹線で四角形の隆起を作り出して代替するもの（斜向-4）などがある。トゥルースデイル分類の Grain Class の一部にあたる。

○蟻紋群（以下蟻紋）

肉食獣の頭部、体部と長い尾をとまなう動物が描写される紋様であり、大小一組で描かれることが多い。浮彫、半浮彫、線描と表現手法が多様であるが、大きい蟻紋の尾の表現が体部と区切られるもの（蟻紋 1）と、背の稜線が一続きになるなどして区切りがなくなるもの（蟻紋-2）に大別される。トゥルースデイル分類の Hydra Class に相当する。

○蕨手状雲紋群（以下雲紋）

蕨手状の紋様を基調として、紋様を長軸に対して左右対称に配置する。そのほとんどが、甲類であれば短鉤部に獣面をとまなう。獣面の特徴によって分類できるが、詳細は後述する。トゥルースデイル分類の Geometric Class に相当する。

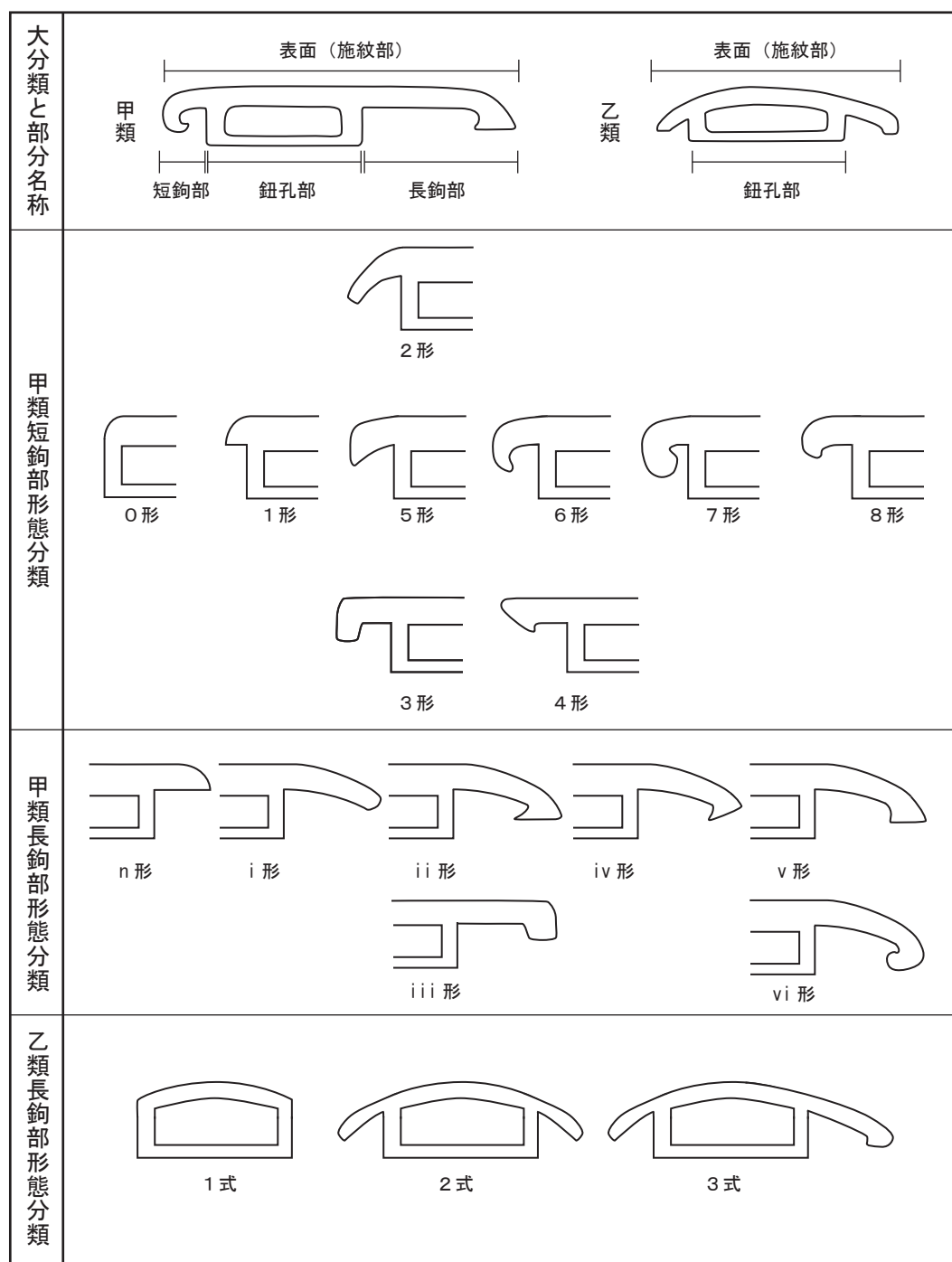


図1 甲類と乙類の形態と部分名称

○縦線紋群（以下縦線）

長軸に対して縦方向の刻線を刻む。刻線を境に施紋面の傾斜が変わるもの（縦線-1）、中軸に比較的近い位置に刻線を刻むもの（縦線-2）、施紋面の両

端付近に刻線を刻むもの（縦線-3）がある。トゥールースデイルが Ridge Class としたものも含まれる。

○無紋

紋様をとみなわないもの。

○その他

上記の分類にあてはまらないもの。

また、上記の雲紋群をはじめとした瓊には、短鉤部付近に獣面紋をとまなうものが散見する。獣面紋は、以下のように分類できる

I類：両眉が直線的につながり、鼻梁に中軸線をとまなわない。眉毛は直線的に上方にのびるが、先端の巻きは小さい。目の輪郭は眉から鼻にかけての輪郭と重なり、直線的になる。

II類：両眉が直線的につながり、鼻梁には中軸線をとまなう。眉毛は直線的に大きく上方にのび、先端で大きく巻き込む。目の輪郭は眉から鼻にかけての輪郭と重なり、直線的になる。

III類：眉間が谷状に描写され、鼻梁に中軸線をとまなう。眉毛は湾曲しながらも左右端で情報にまっすぐのび、先端で大きく巻き込む。目の輪郭は鼻から眉にかけての輪郭と分離し、曲線的になる。

IV類：眉間が谷状に描写され、鼻梁に中軸線をとま

卷螭紋	縦横列粒紋群	斜向列粒紋群	獣面紋
	 縦横-1	 斜向-1	 I類
螭紋群	 縦横-2	 斜向-2	 II類
 螭紋-1 螭紋-2	 縦横-3	 斜向-3	 III類
 雲紋	 縦横-4	 斜向-4	 IV類
 雲紋			 V類

図2 玉瓊に頻出する紋様の分類

なう。眉毛は湾曲しつつ反りながら上方にのび、先端で大きく巻き込む。目の輪郭は鼻から眉にかけての輪郭と分離し、曲線的になる。

V類：眉間が谷状に描写されるが、鼻梁に中軸線をとみなわない。眉毛は湾曲するが情報にはのびず、先端も巻き込まない。目の輪郭は鼻から眉にかけての輪郭と分離し、曲線的になる。

2-3. 形態変化の検討

甲類と乙類のうち、璫の大多数を占めるのは甲類である。甲類の諸属性のうち、時間的変遷が想定しうるものとして、まず短鉤部が挙げられる。短鉤部の形態は表面の施紋範囲をどこまで確保するかという設計意識と関連し、これが鉤孔部の外側まで拡張され、その端部処理も装飾化してゆく流れの変化が想定できる。

目下発掘事例のなかで最も古いといえる玉璫は、太原晋国趙卿墓（図3-2）や侯馬祭祀遺跡（図3-1）

などの春秋時代後期の遺跡から出土している。これらは0形の長鉤部と0形の短鉤部をとみなうが、これらは表面の施紋部をそれぞれ水平方向と鉤孔部方向に拡張した結果生じたものであると理解できる。長鉤部が施紋部を水平方向に拡張したために成立したことは、陝県後川村2040号墓例が長鉤部を別づくりにして接合している点からも追認できる（図3-3）。この0形の短鉤部を、表面から屈折なく展開できるように鉤孔部より外に拡張した結果生じたのが1形の短鉤部であり、少なくとも戦国後期から秦代には出現している。これがさらに外側に拡張された結果生じたのが2形であり、1形の端部を平坦に整えると5形が得られる。これをさらに鉤孔方向に拡張し、装飾化したものが6形だろう。7形は6形が端部まで肥厚したもの、8形は6形や7形が矮小化したものと理解できる。

ただしこのような一連の流れのほかに、長沙楚墓から3形の短鉤部をとみなうガラス製の事例が出土

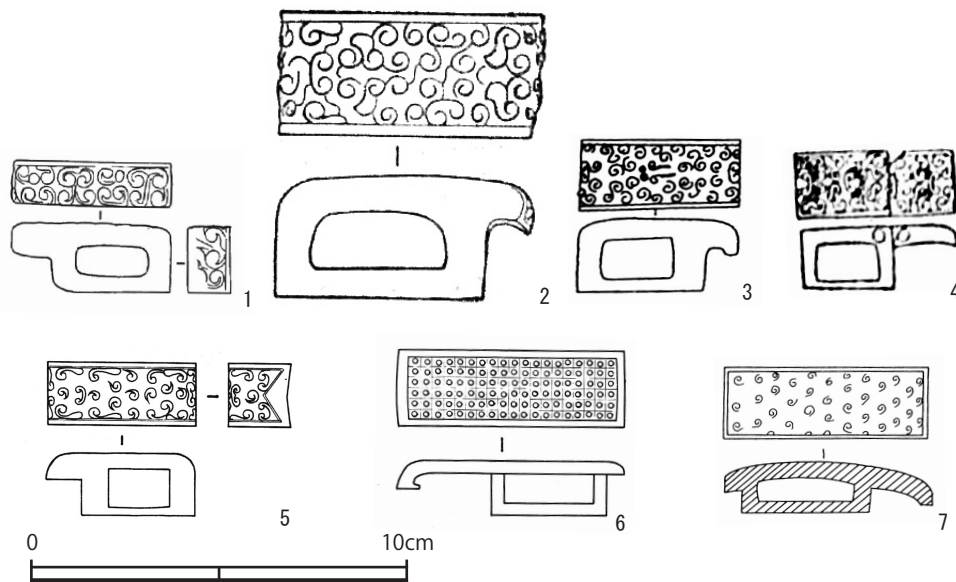


図3 前漢以前の玉璫（1：表1-1、2：表1-2、3：表1-5、4：表1-3、5：表1-6、6：表1-7、7：表1-8）

している（図4-2~5）。これに類似するガラス製品が衡陽市の戦国時代中後期の墳墓から出土しており（図4-1）、これは平坦な施紋部に、四肢が長大化した螭紋をともなう事例である。このガラス製品の端部処理が甘くなり、端部下端に突出部を残すようになったものが長沙楚墓例であろう。晋国趙卿墓に端を発する一連の事例の表面がやや湾曲しているのに対し、これらの事例は表面が直線的になる点に特色がある。3形の短鉤部は、このようなガラス製品の形態を模倣した可能性を考慮しておきたい、さらに4形は、3形の端部を斜め方向に平坦部を作り出した事例と考えられる。長沙楚墓のガラス製品は縦横紋-2をともなうなど漢代以降の玉璫につながる要

素もあり、素材は異なるものの漢代以降の製品に影響を与えた可能性が考えられる。

長鉤部もまた、晋国趙卿墓例や長沙楚国墓地例から派生したものとして理解できる。趙卿墓例のn形の長鉤部をさらに外側に拡張したものがi形、その端面調整を兼ねて装飾的に拡張したものがii形、ii形が粗雑化ないし矮小化したものがiv形およびv形である。vi形はii形下端の面取りが省略されたものだろう。iii形は3形短鉤部と同様長沙楚国墓出土例に散見するため、やはり戦国時代の楚国に特徴的な形態として位置付けられよう。

以上のように、いくつかの派生形態をともないながらも、短鉤部と長鉤部には一連の変化を想定でき

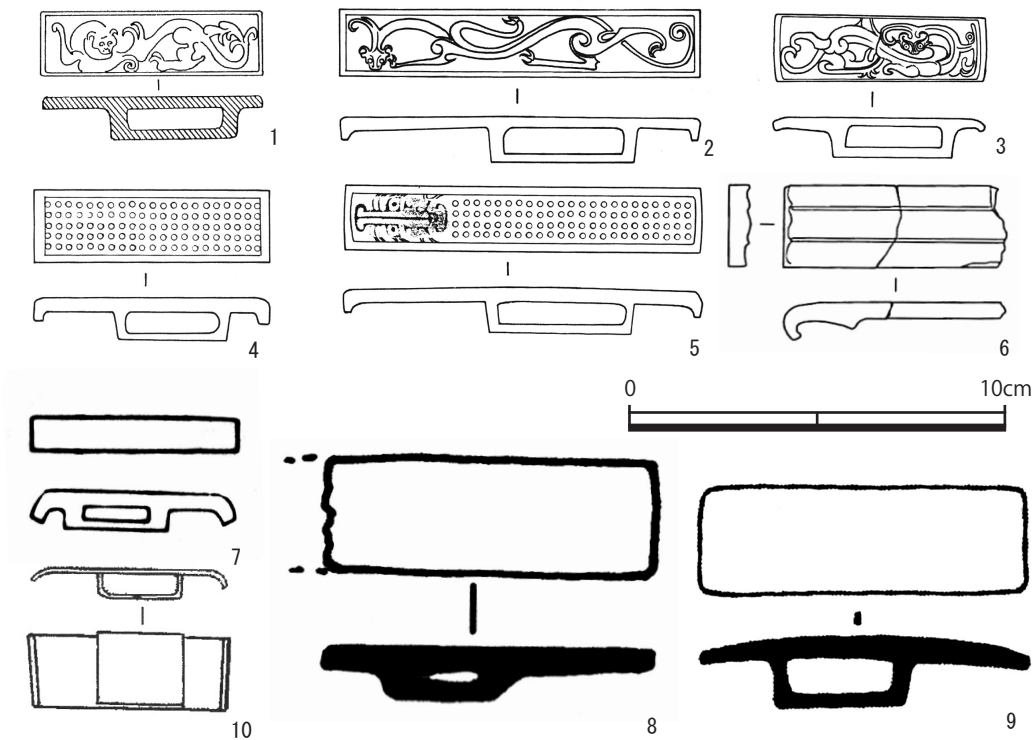


図4 青銅・ガラスなど可塑性素材の璫（1：表2-6、2：表2-5、3：表2-4、4：表2-1、5：表2-3、6：表2-9、7：表2-7、8：表2-10、9：表2-11、10：表2-12）

る。この2つの属性の対応関係をみたのが表3である。この表から、短鉤部と長鉤部の諸形態が1対1で対応するわけではないものの、短鉤部と長鉤部の組み合わせでそれぞれ最も多いものが、上述した短鉤部および長鉤部に想定される変遷とおおよそ一致している。これは先行する形態と後続する形態がある程度の時間共存しながらも次々に継起し、結果として盛行した年代を異にしていたことを示唆している。また短鉤部3形はおもに長鉤部iii形に対応することから、これらの形態は上記の変化の流れとは異なる流れに位置付けられることが改めて確認できる。

これを別の角度から検証しよう。上述した紋様およびその要素のうち、もっとも変遷を追跡しやすいのが獣面紋である。獣面紋は上述した長沙楚国墓地例を例外として、太い眉、杏仁形の目、柱状の鼻、心葉形のたてがみを共通の特徴とし、異なる個体間で著しく類似している。そのなかでも上述した諸類型に分類された獣面紋は、I類からV類へと、記号的な描写からより躍動感のある描写に変化してゆく流れが想定できる。この短鉤部との対応関係を確

認したのが表4である。これをみると、I類に3形と4形が、II類に6形が、III類に6形と7形と8形が、IV類に6形と8形が、V類に8形が対応する。このことから、おおよそ獣面紋IからV類への変化が短鉤部の消長と連動していることがわかる。したがって、短鉤部の変化は獣面紋との対応関係からも追認できる。

以上から、短鉤部および長鉤部の形態によって設定された型式区分が、玉璣の時間的変化とおおよそ代表していることがわかる。ただし、長鉤部のうち大多数をしめるii形は戦国後期の墓からも報告されており、実態としては相対的に早く出現した長鉤部形態が、遅く成立した形態と併存する時間がある程度存在したと考えられる。したがって本稿では短鉤部の形態を玉璣の時間的変遷をもっとも端的に代表する属性と考え、0から8形それぞれに応じて0から8式として大型式を設定し、長鉤部の形態を小型式として記述する。例えば、6形の短鉤部とii形の長鉤部をもつ玉璣は6-ii式と呼称する。ただし以下では基本的に1~8型式の大分類を中心に検討する。

表3 甲類玉璣における短鉤形態と長鉤形態の対応関係

() 内は破損例を含めた判断が難しい資料を含めた点数。以下同様。

また濃い網掛は短鉤・長鉤部双方で最多のものを示し、薄い網掛はいずれか片方で最多のものを示す。

	0	1	2	5	6	7	8	3	4	不明	計
n	5										5
i	1	7	1	1(2?)	3		2				15(16?)
ii		2		4	28	5(6?)	5	2	4(6?)	1	51(53?)
iii				2				1	1		4
iv			(1?)	1	6	2	(2?)		1		10(13?)
v			1		2(3?)	1	9(10?)			(1?)	13(16?)
vi				1	2					1(2?)	4(5?)
不明		1		(1?)	1(2?)	1	1(2?)		1	5	9(12?)
計	6	10	2(3?)	9(11?)	42(44?)	9(10?)	17(21?)	3	7(8?)	7(9?)	112(125?)

表4 甲類玉璫における短鉤形態と獣面紋の対応関係

	I	II	III	IV	V	計
3	1					1
4	2					2
6		5	2	1		8
7		(1?)	1(2?)			1(3?)
8			1(2?)	4	3	8(9?)
不明	1	2		2		5
計	4	7(8?)	4(6?)	7	3	25(28?)

2-4. 玉璫の紋様の変遷

以上を踏まえ、玉璫に施される紋様の消長について考えたい。甲類短鉤部によって代表される大型式と、表面に施される紋様との対応関係を表したのが表5である。巻螭紋は0式のみに対応し、出現当初の型式に特有の紋様であったことがわかる。1から6式に対応するのが斜向紋、縦横紋、螭紋、無紋の事例であり、巻螭紋に後続して出現するのがこれらの紋様であるといえる。雲紋は6から8式のみに対

応し、上述した紋様と比べ出現が遅れることがわかる。また斜向紋、縦横紋は8式には対応せず、7式ではバリエーションが減る。これらの紋様と入れ替わるように雲紋が盛行している様子を見出すことができる。

この紋様の消長について、獣面紋と紋様の対応関係を確認したのが表6である。獣面紋Ⅰ類は斜向紋と縦横紋に、Ⅱ類は斜向紋と雲紋に、ⅢからⅤ類は雲紋のみに対応する。すなわち、上述した短鉤部にみる斜向紋、縦横紋、雲紋の消長と、獣面紋の変化にみるそれとが一致するのである。このことから、斜向紋と縦横紋はある程度の重複を挟みながらも雲紋へと入れ替わっていったことが示される¹⁾。

螭紋は、欠落する型式がありつつも8式まで対応する。上述した紋様の小分類のうち、1点だけではあるが1式の事例に螭紋-1が対応している。一方螭紋-2は6から8式に対応することから、全体として螭紋-1→螭紋-2と遷移する。

表5 甲類玉璫における短鉤形態と各種紋様の対応関係

	巻螭	斜行				縦横				螭紋		雲紋					縦線			無紋	特殊	不明	計
		1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	2	3	4	5	1	2	3					
0	5(6?)																					5(6?)	
1		2	2				(1?)			1						1			2	1		9(10?)	
2		1			1	(1?)	1												1			4(5?)	
5		2		1		(1?)	1		1	1									2			8(9?)	
6		4	3	1		5	1	4(5?)		6	3	5	1	1			1		4	1	1	41(42?)	
7			(2?)				1				1		1						2			5(7?)	
8											3		1(2?)	4	4			1	1			14(15?)	
3		(2?)				1	1			1												3(5?)	
4		1					2(3?)	(1?)		1								(1?)				4(7?)	
不明		2	1			3	3				1	2		3								15	
計	5(6?)	12(14?)	6(8?)	2	1	9(11?)	10(14?)	4(6?)	1	10	8	7	3(4?)	8	4	1	1	1(2?)	12	2	1	108(113?)	

表6 玉璫における各種紋様とそれとともなう
獣面紋の対応関係

	I	II	III	IV	V	計
斜行	3	1	1			5
縦列	1					1
雲紋		7	4	8	7	26
計	4	8	5	8	7	32

2-5. 各型式の年代

以上、玉璫の属性分析から変化の傾向を確認し、短鉤部の形態による型式区分が有効であることを明らかにした。それでは、短鉤部形態によって設定される各型式の存続年代はどのように理解できるだろうか。各型式のおおまかな存続年代を把握するために、表1では秦代までの遺構を0期、前漢初頭から景帝期の遺構を1期、武帝期の遺構を2期、昭帝から宣帝期にかけての遺構を3期、元帝から前漢滅亡にかけての遺構を4期、新代以降の遺構を5期として出土遺構の時期を付記している。年代は基本的に各報告書の記載によるが、必要に応じて修正をおこない、その手掛かりとなった要素を備考欄に記入している。また多くの玉璫が収録されている『陝西出土玉器』に記載している年代は、出土状況がわからず疑問の余地のあるものも多いため、表中には記載しているものの、参考程度にとどめておく。

0式は1期以降の遺構から出土することはない。上述したように最古の事例は春秋後期の遺構から出土しているが、最も新しい事例は戦国中期の長沙楚国墓地167号墓例（図3-5）であると考えられ、戦国後期以前に衰退している。

1式は0期に遡る事例が散見し、戦国後期には出現していることが、長沙楚国墓地1065号墓例（図3-4）からわかる。最も出土数が多いのは1期であり、一部2期の遺構からも出土している。古物の可能性もあるが、もっとも新しいものでは3期末の海昏侯劉賀墓からそれらしいものが出土している。最新段階の評価が難しいが、前漢の初期に盛行した型式と

して評価できる。

2式は点数が少ないものの、広州漢墓1068号墓例（図5-1）が1~2期に遡る。また玉製の事例ではないものの、秦始皇陵兵馬俑出土の青銅璫（図4-7）が甲類2-i式に分類可能な形態をとっており、これが玉璫の形態を反映していた場合、0期に遡る可能性がある。また2式もまた2期の遺構からの出土例がある。

5式は文帝期の遺構と推定される胡家草場墓地12号墓出土事例が、確実なものでは最も古く、1期に遡る確実な事例である（図5-3）。また『陝西省出土玉器』に高祖長陵陪葬墓園出土例として前漢前期に位置付けているものがあり、その年代観に従えば1期のさらに早い時期に遡る可能性が高い。5式そのものの数は多くないものの、目下0期に遡る事例はないため、1期以降に成立する型式と考えられる。新しい遺構では3期の墓から出土している。

6式は、平面形態がやや特殊な事例ではあるが1期の徐州市獅子山漢墓出土例が年代が確実なものでもっとも古い事例である。本遺跡は劉郢（客）ないし劉戊墓に比定されるが、劉尊志は墳墓の内容が呉楚七国の乱を起こした劉戊墓にしては豊かすぎるとし、劉郢（客）墓に比定する[劉2011]。この推定が正しければ劉郢（客）が亡くなる文帝期の前175年前後には6式が成立していたことになる。また劉茂墓説を採るとしても景帝期の前154年前後に位置付けられ、いずれにせよ1期に遡ることになる。このほかに1期に遡る可能性がある事例として、三門峡市火電廠21号墓例（図5-4）や広州漢墓1175号墓例（図5-5）があり、特に前者は前漢前期の中でも早い段階に遡る可能性がある。ただし1期に遡る可能性がある資料は少なく、2期以降に集中する。2期の古い資料として南越王墓出土例（図5-6）が挙げられる。この墓は前122年に亡くなった南越王趙昧の墓と報告されている。以上から、6式は1期に成立し、2期以降に盛行した型式として位置付けられよう。3期、4期の遺構からも複数出土し、5

期の遺構からも少数ながら出土している。

7式は双乳山1号墓例(図5-7)が最も古い。この墳墓は武帝期末年に亡くなった済北王劉寛の墓と考えられており、2期から3期の移行期に位置付けられる。本例は副葬された長剣にともなう事例であり、これについては後述する。それ以外の事例は年代の判断が難しい長沙市の前漢後半の事例(図5-9)を含め、3~4期に集中する。

8式は西安市電信局第二長途通信大樓110号墓(図5-10)をはじめ4期に出現し、5期にはいっても存続する。5期の資料数そのものが多いもの、最も新しい資料は東晋代の墳墓から出土している。

3式は1期の孔家坡8号墓から出土している木剣にともなう事例(図5-11)がもっとも古く、一部4期および5期の遺構からの報告事例がある。4期の洛陽市浅井頭漢墓の事例(図5-12)に関しては図面が簡素であり、本来異なる形態である可能性が捨てきれないため判断を保留したい。後者に関しては墳墓ではなく遺構の埋土から出土した事例である。形態も長さに対して幅広く特殊な形態をとるため、当該期のなかでは例外的な存在である。このように3式は1期以降を中心に組成する型式であるが、ガラス製の事例には0期に遡る事例として長沙楚国墓地の製品がある(図4-2, 4, 5)。前漢前期に楚の影響を受けて成立するものの、例外的ながらそれ以降も散見する特異な型式である。

4式は4点の資料のうち広州漢墓1175号墓例(図5-13)をはじめ3点が2期、1点が3期に位置付けられる。ただし、潜山彭嶺26号墳(図5-14)から出土した木剣にともなう玉璫様の玉製品が、4式に類する端部形態を示している。鈕孔部に方孔をとまなわれないものの、これが玉璫に含められるのであれば4式は1期に出現していたことになる。なお5期に位置付けられる墳墓からも1点出土しているが、これに関しては後述する。

以上から、1式と2式は0期に出現し、1期に盛行する型式、5式は1期に出現し3期まで存続する

型式、6式は1期に出現し2から4期に盛行する型式、7式は2期末に出現し4期に盛行する型式、8式は4期に出現し5期まで盛行する型式とみなすことができる。以上から、上述した1式から8式に至る型式変化は、出現順、盛行順いずれも0式→1式・2式→5式・6式→7式→8式の順に遷移しており、上述した先行型式と重複しつつ1式から8式に順に派生してゆくという想定は、出土遺構の年代と矛盾がないといえる。

2-6. 乙類の変遷

以上甲類の変遷について検討したが、乙類は甲類に比べ形態変化に乏しいが、側面形に応じて以下のように分類できる。

1式：鈕孔部の前後に鉤部がのびないもの。

2式：鈕孔部の前後に対称に鉤部がのびるもの。

3式：鈕孔部の前後に非対称に鉤部がのびるもの。

これを上述した時期区分にあてはめると、1式は0期の白鷺洲585号墓例(図6-1)が最も古い事例である。ついで象牙製の事例ではあるが、馬王堆3号墓出土長剣にともなう璫(図6-3)が古く、1期まで遡る。最も新しい事例は東陽漢墓群30号墓から出土した事例(図6-4)で、5期に位置付けられる。2式は確実に古く遡るものに広州漢墓1175号墓出土の特殊な紋様をとまなう資料(図6-5)があり、2期に位置付けられる。ただし2式も『陝西出土漢代玉器』に1期に遡る可能性のある資料が掲載されていることから、1期に出現している可能性もある。2式もまた石巖里200号墓例(図6-6)など5期の遺構から出土している。3式は3期に遡る海昏侯墓出土のメノウ製事例(図6-7)が最も古く、上孫家寨59号墓例(図6-8)をはじめ5期まで存続する。

このように整理すると、0期に1式が、1ないし2期に2式が成立し、これに遅れて3式が3期に成立することがわかる。ただしこの時、2式にとまなう紋様をみると、大多数が螭紋・2式および雲紋・4ないし5式と、甲類の変遷のなかで最終段階に出現

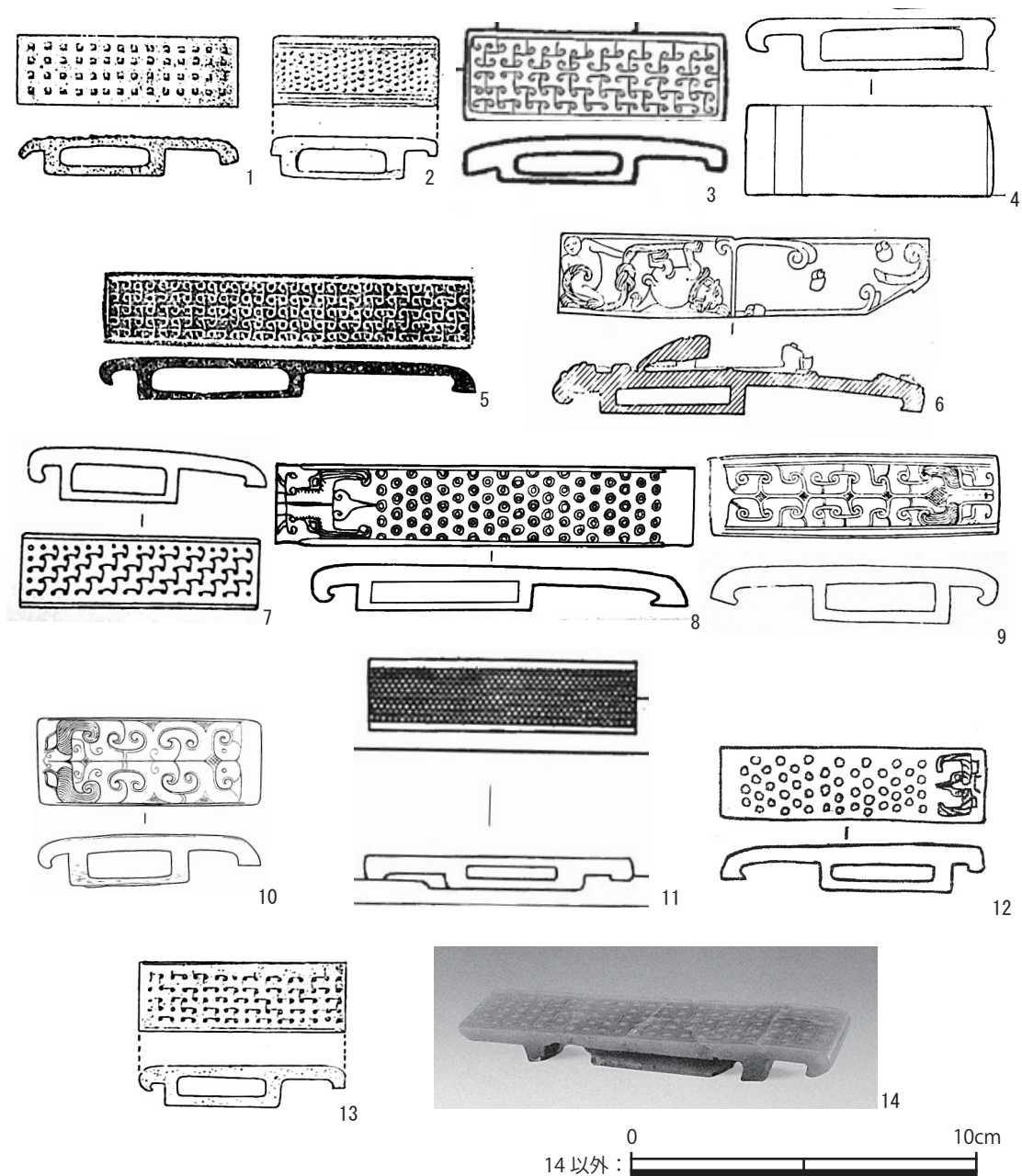


図5 前漢期の甲類玉璫の諸例（1：表1-32、2：表1-39、3：表1-25、4：表1-26、5：表1-37、
6：表1-46、7：表1-43、8：表1-84、9：表1-96、10：表1-102、11：表1-16、12：表1-105、
13：表1-40、14：表1-11）

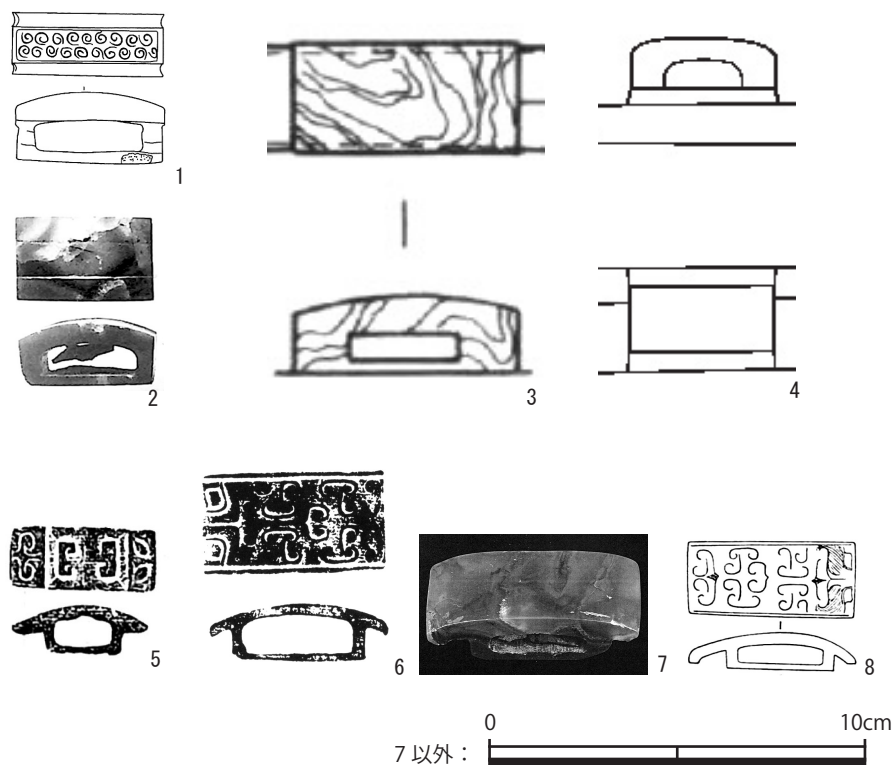


図6 乙類玉璫の諸例（1：表1-10、2：表1-89、3：表1-23、4：表1-129、5：表1-38、6：表1-123、7：表1-82、8：表1-138）

する紋様であることがわかる（表6）。点数そのものが少ないものの、同じ傾向を3式に関しても指摘することができる。すなわち、2式および3式の出現自体は古く遡りうるが、その盛行期は大きく時期が下ることを示す。乙類の出土の半数以上が4期以降の遺構に偏っていることも、これを傍証する。

表6 乙類玉璫における各型式と獣面紋の対応関係

	斜向	鱗紋	雲紋		縦線	無紋	特殊	計
	2	2	4	5	2			
1	1				1	3(4?)		5(6?)
2		2	1	2	1	1	2	9
3				2		1		3
計	1	2	1	4	2	5(6?)	2	17(18?)

3. 考察

以上、玉璫の変遷を属性分析と出土遺構の時期から考察した。その結果を踏まえ、以下では玉璫の製作状況について考察する。

3-1. 漢代以前の璫

目下最古の玉璫は春秋後期の墳墓から出土した事例であることは上述した。これに連なる戦国時代の事例には卷螭紋（図 3-1~5）が描かれており、これが斜向紋-2 や縦横紋-2 の祖型になったと考えられる。これらの事例は三晋地域を中心に分布しており、長沙楚墓にみるように一部長江流域にも展開している。

一方、螭紋はこれら三晋地域の事例にはみられず、長沙楚墓や衡陽市苗圃山など楚国の領域から出土するガラス製事例（図 4-1~3）に見出される。これらの事例は三晋地域の事例とも形態が異なり、楚独自に発達した一群であるといえよう。漢代玉璫の形態は三晋地域の事例に起源を求められることは上述した通りであるが、表面に描かれる紋様には三晋地域に加えて楚地域の要素が加わり、その双方が融合して秦および漢に継承されたといえる。

3-2. 玉璫の変遷過程からみた製作状況

前章で確認した玉璫の変遷を踏まえると、戦国時代中期から武帝期にいたるまでの間に各型式の派生が急速に起こっていることがみてとれる。続いて新しい型式が派生するのが昭帝期以降のことであり、これは玉璫全体のなかで最も多くを占める 6 式の派生型式として出現する。以上を踏まえると、0 式が衰退する戦国中期から景帝期までを玉璫の形態がさまたげに試行された段階、武帝期を玉璫の主流の型式が出そろい、6 式、特に 6-ii 式と中心的な形態として標準化が進んだ段階、昭帝期から宣帝期を一度標準化された玉璫の変容が始まる段階と位置付けることができる。また紋様の消長を踏まえると、斜向

紋や縦横紋は卷螭紋からの連続性が認められ、春秋戦国時代からの紋様の延長線上で理解できる。元帝期以降にはこの紋様が消滅し、かわって出現した雲紋が多数を占めるようになる。期間の長さに対し出土点数が多くないことも要因としては大きい。新代以降は玉璫に目立った変化がみられなくなる。そのような意味で、元帝期以降は玉璫のデザインが完成され、同時に変化が停滞した段階とも評価することができる。

玉璫の変遷のなかでは複数の型式が入り乱れる状況がほとんどであり、新しい型式は旧来の型式を淘汰するわけではなく、派生的に出現するに過ぎないことは前述した。特に武帝期には数の多寡はありながらも 1 式から 6 式までが存在していたことになり、これらすべてに製作年代から埋葬年代までのタイムラグを認めることは不合理である。このような状況からは、旧来の型式を維持する製作者と新しい型式をもっぱら製作する製作者が、同時に存在していた状況がうかがえる。ただし、各型式が製作者集団と一対一で対応するわけではないことは以下で述べる。

武帝期には全型式のなかで最も出土数が多い甲類 6-ii 式が成立する。そのなかにはいくつか同一遺構ないし墳墓から出土した事例があるが、その紋様が一致することはなく、異なる製作者から入手した可能性が高い。したがって武帝期には、異なる製作者間で志向される璫の形態が共有されていたと考えられる。

昭帝期から宣帝期には、武帝期までとは異なる傾向が現れる。雲紋の紋様が出現し、4 期には縦横紋や斜向紋を淘汰していったのは上述した通りである。それに加えて、この時期にはメノウ製の玉璫の製作が増える。メノウ製玉璫は無紋か縦線紋の事例で占められており、ほかの製品と比べ造りが粗雑であることが多い。このことから、メノウ製玉璫はそのほかの有紋の事例とは異なる製作者の手によってつくられたことがうかがわれる。興味深いのは、こ

のような製品が西安市近郊でも出土していることである。少なくとも昭帝期から宣帝期にかけては、長安近傍で複数の製作者集団が共存していた状況を想定できる。

異なる系譜の玉璫が漢の領域内に存在したことは、廬江遺跡出土の玉璫からもうかがい知ることができる（図4-8, 9、図7）。廬江出土の璫は青銅製事例を含め無紋の事例が多く、形態が前漢中期から後期に一般的な事例とは異なる様相を呈する。また同遺跡では青銅製の長剣が多く出土しており〔安徽省文物考古研究所編著 2013〕、中国北半で大多数を占める鉄製長剣とは異なる販路にのる製品が用いられていた可能性を指摘できる²⁾。このような青銅製長剣にともなう璫の事例は少ないが、鉄製長剣や戦国系の青銅剣とは異なる璫が用いられていた。このような事例の存在は、特定の工房が璫の製作を独占していた状況は少なくとも想定しがたいことを示している。

4期以降になると、螭紋、雲紋、無紋以外の事例が衰退し、以降これらの紋様の事例のみが製作されることになる。最も数が多い雲紋の事例にはいずれも獣面紋が描かれるが、これはいずれもⅣ類ないしⅤ類に分類され、目や眉といった各部位の特徴を共有している。そのなかには描線を削り出し突線で引くものと沈線で引くものといった違いがあるなど、

複数の製作者の存在を想定できるものの、同じ図像を共有できるほどには頻繁に接触しうる近しい関係が維持されていたことが想定できる。4期以降玉璫そのものの出土数が減少することからは、玉璫の製作そのものが衰退し製作者集団の数も減っていたことが考えられる。

最終的に螭紋と雲紋の8式に収斂した甲類玉璫は、目下最も新しいもので東晋期までは墳墓からの出土が確認できる。5期の資料はその期間の長さには比して数が少なく変化にも乏しいため、新しい墳墓からの出土事例が古い玉璫を再利用した可能性も否定できない。しかし一方で元帝期以降の製作に下る可能性もまた、新しい資料から縦横紋や斜向紋が欠落することから指摘できる。東晋初期の仙鶴観6号墓出土例は鉄製長剣にともない、珌や剣首といった装具も長剣への着装を示す位置から出土していたという〔南京市博物館 2001〕。特に珌と剣首はいずれも玉璫の雲紋にともなう獸面紋Ⅴ類を共通して施しており、元帝期以降に同時に製作されたことがうかがわれる。剣と鞘の装具が同時に製作されていることから、これに取り付けられた玉璫も同時に製作されたと考えられる。したがって鞘などの装具とセットで長剣そのものが長期間保存されていた可能性も残るが、現状では玉璫の製作が後漢代以降も存続していたと考えるのが合理的だろう³⁾。

3-3. 玉璫の使用形態と長期保有の可能性

戦国時代から南北朝期にかけての玉璫の製作状況は上のように整理されるが、その使用形態はどうか。『漢書』『王莽伝』に王莽が「璫を解く」記述があり、先学が指摘するようにこの「璫」が璫を示すものであれば〔林 1973〕、これは璫を長剣鞘から分離する儀礼的行為の存在を示している。出土事例からみると璫は鞘に括り付けるのではなく、漆で膠着させることで固定する。したがってこの「璫を解く」行為は、不可逆な破壊を璫付きの鞘に施すことになり、璫そのものも長剣とは独立した履歴を

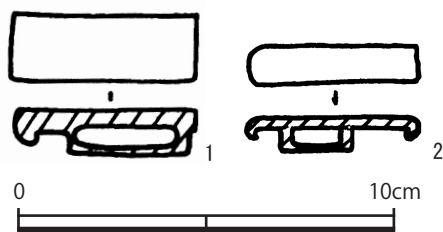


図7 廬江遺跡出土無紋玉璫（1：表1-70、
2：表1-117）

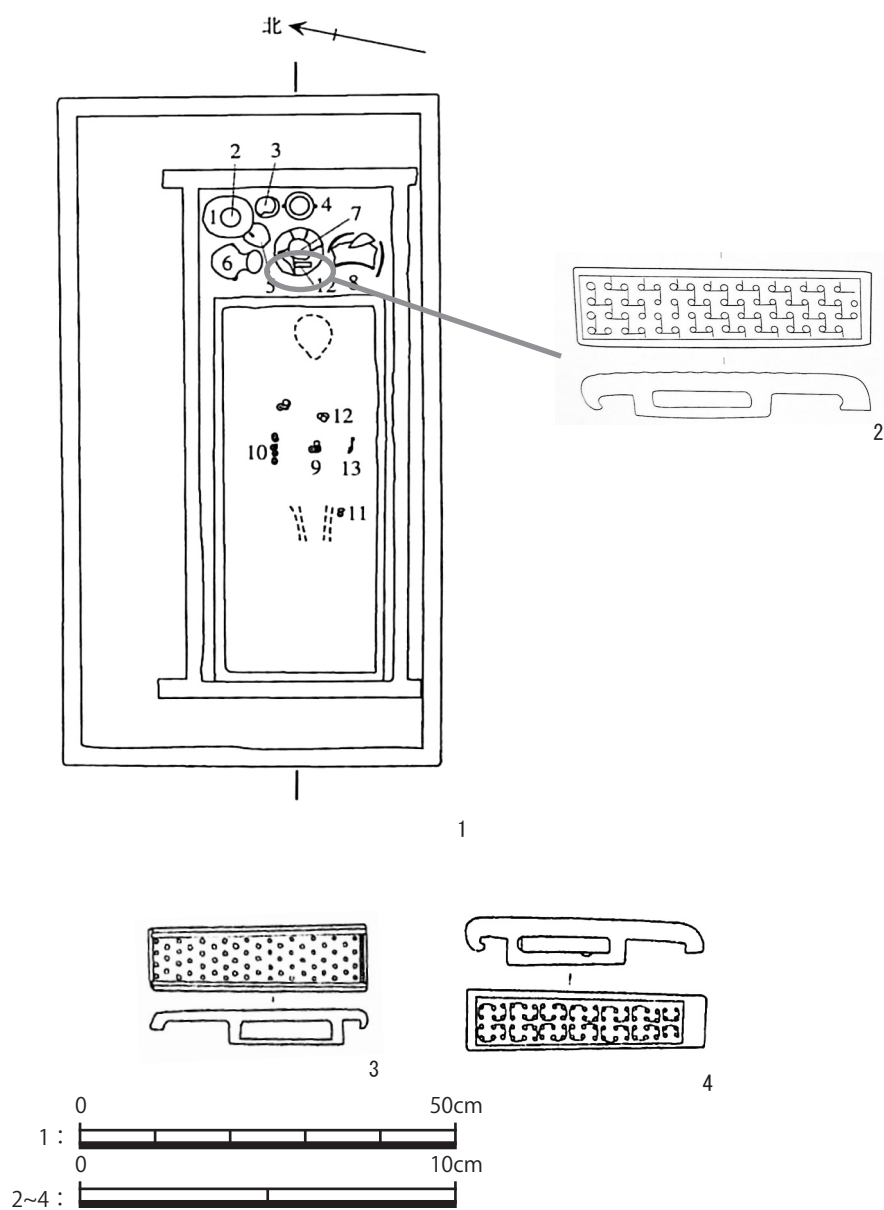


図8 転用ないし再獲得された玉璫とその出土状況（1：丁家皂廬4号墓、2：表1-124、3：表1-44、4：表1-45）

たどりうる余地が生じる。

玉璫には長剣にともなわず単独で出土する事例がいくつか存在する。このなかには孔家坡8号墓例(図5-11)のように木剣にともなう玉璫も含まれると考えられるが、一方で山東省丁家皂盧4号墓例(図8-1, 2)のように単独で副葬された可能性の高い事例も存在する。本例は頸のすばまる施釉壺の肩部上から出土しており、その出土状況からは木剣などをともなっていたことも考え難い。本例は縦横紋-2をとともなう4式の事例である。上述したように4式は数が少ないながらも多くが1~2期の遺構から出土しており、縦横紋-2をとともなう事例は元帝期以降の遺構からはほとんど出土していないことから、製作時期は宣帝期以前に遡る可能性が高い。しかしこの墓からは大泉五十が50点出土しており、王莽期に造営されたことが明らかなである[山東省文物考古研究所編著2020]。すなわち宣帝期以前に製作された玉璫が、少なくとも50年以上の年月を経て単独で埋葬されたものと解釈できる(図8-1, 2)。

このほかに、破損した玉璫を転用した事例も存在する。双乳山1号墓では長剣にともなう玉璫(図6-7)以外に2点の玉璫(図8-3-4)が出土しているが、これらは含玉として被葬者の口中から出土したものである。長剣にともなう個体は7式、含玉とされる転用例は6式に分類できる。7式は昭帝期以降に盛行する型式であり、副葬段階で最新の型式であったと考えられる。6式はそれ以降も盛行するため判断は難しいものの、含玉の玉璫の製作時期は長剣にともなうそれよりも遡る可能性がある。ただし6式そのものが武帝期以降に盛行する型式であるため、製作時期の差は長くても60年前後であったと考えられる。

また、洛陽浅井頭漢墓出土の3式例(図5-12)は、獸面紋Ⅰ類をとともなう斜向紋の事例であり、昭帝期から宣帝期にかけて製作された可能性が高い。報告ではこの璫は長剣にともなっていたとされる。しかし同報告でこの遺構は前漢末に位置付けられ、出土

した鏡などからもその見解は補強される。したがって本例もまた装具とともに長剣が長期保管されたか、古い璫を転用した事例である可能性が高い。

このように玉璫が製作時期を大きく下る遺構に副葬される事例は、前漢期の墳墓に散見する。しかし目下前漢期の事例では100年以上の時間差がある事例は多数の副葬が認められる海昏侯劉賀墓を除いて見出しがたく、また多くの事例はあまり時間を隔てず最終的な副葬がおこなわれた事例であることもまた指摘しておきたい。

3-4. 中国境外で出土した玉璫について

以上、戦国時代から東晋期にかけての玉璫の製作と使用の状況について考察した。当該期における玉璫は、製作から最終的な埋没まで100年を超える時間差は現状では指摘できず、かつ大きな時間差が明確に指摘できる事例も限定的であった。各王朝の支配領域外に搬出される際も大きな時間差は、基本的にはなかったと考えられる。これを踏まえ、これまで知られている中国境外の玉璫について、その位置づけを考えたい。

・伝コーカサス出土大英博物館所蔵玉璫 (Museum Number 1923, 0716.88)

クバン地域出土と伝えられている玉璫であり、ロストウツェフにより紹介されている[Rostovcev 1930]。共伴した遺物から、3世紀のサルマタイの墳墓からの出土品と考えられている。側面形からは6-ii式に属すると判断できる。また紋様は磨滅が著しいが、雲紋の事例であることは明らかであり、特に磨滅が激しい短鉤部にはわずかに目とおぼしき表現と眉の輪郭が残存している。これをみると、眉間とみられるV字状の描線と上方に大きくのびる眉が確認でき、雲紋-3に分類できる。雲紋-3の事例は前漢末の遺構である西安市電信局第二長途通信大楼110号墓から8式の事例が出土しており、伝コーカサス出土例もこれに近い年代を与えることができよう⁴⁾。

・ゴル・モド2遺跡10号貴族墓

目下最大の匈奴貴族墓とされる、ゴル・モド2遺跡1号貴族墓と同一の墓地に築かれた匈奴貴族墓である。炭素年代測定の結果と共伴する鍔の形態から、南北分裂後の北匈奴の貴族墓と考えられ〔河南省文物考古研究院ほか編著 2021〕、中国の後漢期に並行する。この墓の被葬者の頭部付近から、白玉製の無紋の玉璣が単独で出土した（図9）。本稿の分類基準で考えるなら、本例は7-ii式に位置付けられる。元帝期以降の無紋の事例として、後漢の諸侯王墓とされる朱倉村683号墓墓園出土の8-v式資料や、明帝期から章帝期とされる石鼓墓地113号墓の7-ii式の例が知られている。特に後者は型式・時期共にゴル・モド2遺跡例と対比可能であり、当該期に中国で製作された製品がモンゴル高原に持ち込まれたものと考えられる。

・ロシャヴァ・ドラガナ墳墓

ブルガリア共和国スタラ・ザゴラ市近郊の後1世紀末から2世紀初頭の大墳墓であるロシャヴァ・ドラガナ墳墓から璣をともなう鉄製長剣が出土しており、璣の最西限の出土資料として著名である〔Gonthier, Kostov, Strack 2014〕。この長剣にともなう剣首にはタムガが描かれており、中国境外で製作されたことは明らかである。一方で璣そのものとみると、本稿の分類基準では鱗紋-2を飾る6-ii式に位置付けられ、昭帝期以降によくみられる製品の

典型例である。中国の事例からは本例が製作からあまり時間を経ずにもたらされた可能性は否定できないが、この長剣に現地で製作されたと思しき装具もともなっていることを踏まえれば、持ち込まれて一定期間を経たのちに転用された可能性もある。

上記の例に関連し、中国以西の地域でも在地で製作されたと思われる中国系長剣の玉ないし石製装具が出土しており、これらの多くは後1世紀以降の遺跡に集中する〔Trousdale 1975、村上 1993〕。いずれも6形ないし7形、あるいはその在地的変容形態として解釈可能な形態を示しており、8式の影響を現状では見出すことができない。現状では前漢末以前の中国境外の様相について明らかになっていることは限られるが、伝コーカサス出土例の存在を考えると、中国製長剣ないしその装具は前漢末までにユーラシアに広く搬出され、それを模倣して後1世紀以降の玉璣は製作され始めた可能性を考えておきたい。

おわりに

以上、中国で発達した独特な剣装具である玉璣の展開を整理し、中国境外の様相についていくつかの事例をもとに展望を示した。景帝期末までに基本的なバリエーションが揃った玉璣は、紋様等の刷新をとめないながら宣帝期まで盛期を迎え、それ以降南北朝期まで製作は存続するものの新代以降は変化が停滞し、事例数も減少する。中国境外の事例に関しては点数の少なさも含め課題が残るが、中国境内の衰退傾向に入りかけた段階までに西方に流入し、以降後漢期以降の不足を補うように在地での模倣生産が開始されたと考えられる。

本稿では玉璣の属性分析に終始したため、そのほかの玉製品との関係について立ち入った検討をおこなうことができなかった。雲紋は鐙の玉装具である珌に多く用いられ、璣とは異なり前漢前期の事例に

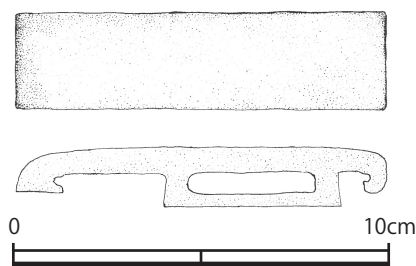


図9 ゴル・モドⅡ遺跡10号貴族墓出土玉璣

獣面紋をともなう事例もある。一方で縦横紋や斜向紋をともなうものは少ない。そのほかの玉器には縦横紋、斜向紋、雲紋、螭紋が同居する製品がそれぞれ存在し、いずれも獣面表現をともなうことがあるため、これらの紋様は本来龍など同一の空想動物の表現を構成する一部分であると考えてよい。それが璚においては時代の変化に応じて交代してゆくということは、剣装具全体での表現の役割区分に変化が生じていたことを示す。その変化はいかに、なぜ起こったのかといった問題は、これから検討してゆく必要がある。

このように本稿で示したのは玉璚の基礎的な整理作業の成果であり、その展開の詳細については今後も検討を続けてゆく必要があろう。

本稿は日本学術振興会科学研究費（若手研究）「紀元前1千年紀末の鉄製長剣の拡散からみるユーラシア交流史」（課題番号24K16192）の助成を受けたものです。

註

- 1) トゥルースデイルが紹介するCG. 65は、かつて個人蔵であったコレクション資料であるが、斜向紋-1をともなう5-ii式の事例であり、出土事例と対比しても前漢前期に遡りうる古い形態を示す。この事例には獣面紋-III類が彫刻されており、真作であれば上述した獣面紋の変遷と矛盾をきたす可能性がある。しかし本例の獣面紋は描線の太さが安定せず粗雑であり、またトゥルースデイルが指摘するように〔Trousdale 1975〕眉間の心葉状渦紋が本来中軸上にあるべきところ、粒紋を避けるようにして中軸からずれている。このことから、この獣面紋は少なくとも製作当初の設計にはなく、のちに追刻されたものと推定されるため、現状では獣面紋の変遷に関して矛盾をきたす資料とはなりえないと考える。既存の製品に獣面紋を刻

んだ可能性のある事例として、発掘事例では合浦県母猪嶺5号墓例を挙げられる。なおCG.65に関してはスミソニアン国立アジア美術館のサイトにて精彩な写真が公開されている（Accession number: S2012.9.1293、https://www.si.edu/object/sword-scabbar-slide-mask-and-raised-hexagons-arranged-grid%3Afsg_S2012.9.1293、2026.01.21 最終閲覧）。

- 2) 青銅製長剣はベトナム北部からも出土しており〔Le 1966〕、前漢の領域では南半でおもに流通していたと考えられる。
- 3) 璚の南北朝期の製作を裏付ける材料として、南齊から南梁に編年される丹陽市建山金家村大墓の磚室墓壁画が挙げられる。この壁画には剣帯をともない長剣を佩用している武人が描かれており〔南京博物院1980、町田1987〕、璚をともなう長剣の佩用形態は少なくともこの時期までは認知されていたことがわかる〔坂川・村上2025〕。この壁画が同時代の長剣佩用形態を描いたものであったとすれば、南齊期までは璚の需要があったことになる。
- 4) 最も類似する紋様構成と形態を見出せるのは漢陽陵北道陪葬15号墓例と洛陽西郊漢墓6002号墓例であるが、これらはいずれも遺構の年代に疑問があるため、ここでは西安市電信局第二長途通信大樓110号墓例によって年代を代表させておく。

《参考文献》

【日文】

- 梅原末治 1938「考古学上より観たる漢代文物の西漸」『古代北方系文物の研究』星野書店、京都
岡村秀典 1984「前漢鏡の様式と編年」『史林』67巻第5号、史学研究会、京都
柿沼陽平 2011『中国古代貨幣経済史研究』汲古書院、東京

京都大学文学部考古学教室 1950『支那古玉図録』
桑名文星堂、京都

坂川幸祐・村上由美子 2025「京都大学所蔵漢代鉄
剣について」『社会文化論集』第 21 号、島根大
学法文学部社会文化学科、松江

高久健二 1993「楽浪墳墓の編年」『考古学雑誌』78
巻第 4 号、日本考古学会、東京

朝鮮古跡研究会編著 1934『楽浪彩篋塚』朝鮮古跡
研究会、京城

朝鮮総督府編 1927『古跡調査特別報告第四冊 楽浪
郡時代ノ遺跡』本文、朝鮮総督府、京城

東方考古学会編著 1990『陽高古城堡』六興出版、
東京

林已奈夫 1973『中国殷周時代の武器』京都大学人
文科学研究所、京都

町田章 1987『古代東アジアの装飾墓』同朋舎、京
都

村上恭通 1993「黒海北岸地域における中国製長剣」
『名大文論集』116、名古屋大学文学部、名古屋

楽浪漢墓刊行会 1979『楽浪漢墓』第一冊、真陽社、
京都

【中文】

安徽省文物考古研究所編著 2013『廬江漢墓』科学
出版社、北京

安徽省文物考古研究所・安徽省蕭縣博物館編 2008
『蕭縣漢墓』文物出版社、北京

安徽省文物考古研究所・六安市文物管理局 2012「安
徽六安市白鷺洲戦国墓 M585 の発掘」『考古』
2012 年第 11 期、考古雑誌社、北京

安徽省文物考古研究所・潜山県文物管理所 2006「安
徽潜山彭嶺戦国西漢墓」『考古学報』2006 年第
2 期、考古雑誌社、北京

安徽省文物考古研究所・淮北市博物館 2007「安徽
省淮北市李樓一号、二号東漢墓」『考古』2007
年第 8 期、考古雑誌社、北京

長沙市文物考古研究所 2024「長沙市天心区桂花坪
東晋墓」『考古』2024 年第 9 期、考古雑誌社、

北京

重慶師範大学歴史与社会学院・北京大学考古文博学
院・重慶市文化遺産研究院 2014「重慶忠県両
漢墓葬」『考古』2014 年第 6 期、考古雑誌社、
北京

大連市文物考古研究所・大連営城子漢代墓地工作隊
2019「遼寧大連市営城子漢墓群 2003M76 の発
掘」『考古』2019 年第 10 期、考古雑誌社、北
京

定県博物館 1973「河北定県 43 号漢墓発掘簡報」『文
物』1973 年第 11 期、文物出版社、北京

広西合浦県博物館 2007「広西合浦県母猪嶺漢墓の
発掘」『考古』2007 年第 2 期、考古雑誌社、北
京

広州市文物管理委員会・中国社会科学院考古研究所・
広東省博物館編著 1991『西漢南越王墓』文物
出版社、北京

郭沫若 1932「釈鞞」『金文叢攷』求文堂、東京

河北省文物管理处 1980「河北邢台南郊西漢墓」『文
物』1980 年第 5 期、文物出版社、北京

河南省南陽市文物考古研究所・武官大学歴史学殷考
古系編著 2011『南陽豊泰墓地』科学出版社、
北京

河南省商丘市文物管理委員会・河南省文物考古研究
所・河南省永城市文物管理委員会・閻根齊主編
2001『芒碭山西漢梁王墓地』文物出版社、北京

河南省文物考古研究院・洛陽市文物考古研究院・蒙
古国烏蘭巴托大学考古系編著 2020『竜出漠北
顕華章 - 高勒毛都 2 号墓地中蒙連合考古記 -』
中州古籍出版社、鄭州

河南省文物考古研究院・洛陽市文物考古研究院・蒙
古国烏蘭巴托大学考古系編著 2021「蒙古国后
杭愛省高勒毛都 2 号墓地 2017～2019 年考古初
掘簡報告」『華夏考古』2021 年第 6 期、《華夏
考古》編集部、鄭州

湖南省博物館 1984「湖南資興東漢墓」『考古学報』
1984 年第 1 期、科学出版社、北京

- 湖南省博物館・湖南省文物考古研究所編著 2004『長沙馬王堆二、三号漢墓』文物出版社、北京
- 湖南省博物館・湖南省文物考古研究所・長沙市博物館・長沙市文物考古研究所 2000『長沙楚墓』文物出版社、北京
- 湖南省文物考古研究所・隨州市考古隊 2006『隨州孔家坡漢墓簡牘』文物出版社、北京
- 黃岡市博物館・湖北省文物考古研究所・湖北省京九鐵路考古隊編著 2000『羅州色与漢墓』科学出版社、北京
- 衡陽市博物館 1984「衡陽市苗圃五馬埗槽茅坪古墓發掘簡報」『考古』1984年第10期、科学出版社、北京
- 江西省博物館 1981「江西南昌地区東漢墓」『考古』1981年第5期、科学出版社、北京
- 賴有德 1981「成都東北郊西漢墓葬發掘簡報」『考古通訊』1981年第2期、科学出版社、北京
- 荊州市博物館 2020「湖北荊州市胡家草場墓地 M12 發掘簡報」『考古』2020年第2期、考古雜誌社、北京
- 遼寧省文物考古研究所編著 2013『姜屯漢墓』文物出版社、北京
- 劉雲輝編著 2009『陝西出土漢代玉器』文物出版社、北京
- 劉尊志 2011「徐州兩漢諸侯王墓研究」『考古學報』2011年第1期、考古雜誌社、北京
- 南昌漢代海昏侯国遺址博物館編著 2020『金色海昏－漢代海昏侯国歷史与文化展』文物出版社、北京
- 零陵地区文物工作隊 1990「湖南永州市鷓子山西漢“劉彊”墓」『考古』1990年第11期、科学出版社、北京
- 呂大臨 1092『考古圖』
- 洛陽市第二文物工作隊 1993「洛陽淺井頭西漢壁画墓發掘簡報」『文物』1993年第5期、文物出版社、北京
- 洛陽市文物工作隊 2004「洛陽唐宮路小学 C1M5560 戰国墓發掘簡報」『文物』2004年第7期、文物出版社、北京
- 洛陽市文物考古研究院 2016「洛陽孟津卅里鋪東漢墓發掘簡報」『文物』2016年第11号、文物出版社、北京
- 洛陽市文物考古研究院・洛陽市師範学院歷史文化学院 2022「河南洛陽市朱倉村 M683 東漢墓園」『考古』2022年第6期、科学出版社、北京
- 南京博物院 1979「江蘇盱眙東陽漢墓」『考古』1979年第5期、科学出版社、北京
- 南京博物院 1980「江蘇丹陽県胡橋、建山兩座南朝墓葬」『文物』1980年第2期、文物出版社、北京、pp. 1-17
- 南京博物院・盱眙県博物館 2013「江蘇盱眙東陽漢墓群 M30 發掘簡報」『東南文化』2013年第6期、江蘇古籍出版社、南京
- 南京博物院・盱眙県文広新局 2013「江蘇盱眙県大雲山西漢江都王陵東区陪葬墓」『考古』2013年第10期、考古雜誌社、北京
- 南京市博物館 2001「江蘇南京仙鶴觀東晉墓」『文物』2001年第3期、文物出版社、北京
- 南京市博物館・南京市玄武区文化局 1998「江蘇南京市富貴山六朝墓地發掘簡報」『考古』1998年第8期、考古雜誌社、北京
- 南陽市文物考古研究所編著 2011『南陽牛王廟漢墓考古發掘報告』文物出版社、北京
- 南陽市文物考古研究所編著 2012『南陽一中戰国秦漢墓』文物出版社、北京
- 寧夏文物考古研究所編著 2012『固原九龍山漢唐墓葬』科学出版社、北京
- 青島市文物保護考古研究所・黃島区博物館 2019「山東青島土山屯墓群四号封土与墓葬的發掘」『考古學報』2019年3期、考古雜誌社、北京
- 青海省文物考古研究所 1993『上孫家寨漢晉墓』文物出版社、北京
- 三門峽市文物工作隊 1996「河南三門峽市火電廠西漢墓」『考古』1996年第6期、科学出版社、北

- 京
 山東大學歷史文化學院・山東省文物考古研究院
 2023「山東淄博市石鼓墓地 2022 年發掘簡報」『考古』2023 年第 11 期、考古雜誌社、北京
 山東淄博市臨淄區文物局 2010「山東淄博市臨淄區
 國家村戰國及漢代墓葬」『考古』2010 年第 11 期、
 考古雜誌社、北京
 山東省青州市博物館 2007「山東青州市馬家塚子東
 漢墓的清理」『考古』2007 年第 6 期、科學出版社、
 北京
 山東省文物考古研究所 1999「山東臨淄金嶺鎮一號
 東漢墓」『考古學報』1999 年第 1 期、考古雜誌社、
 北京
 山東省文物考古研究所編著 2020『山東沿海漢代墩
 式封土墓考古報告集』文物出版社、北京
 山東省文物考古研究所・臨沂市文化广电新聞出版局
 編著 2016『臨沂洗砚池晉墓』文物出版社、北
 京
 山西省考古研究所・太原市文物管理委員會・陶正剛・
 侯毅・渠川福 1996『太原晉國趙卿墓』文物出
 版社、北京
 山西省文物考古研究所侯馬工作站 2003「山西侯馬
 西高東周祭祀遺址」『文物』2003 年第 8 期、文
 物出版社、北京
 陝西省考古研究所編 2001『漢陽陵』重慶出版社、
 重慶
 陝西省考古研究所・始皇陵秦俑坑考古發掘隊 1988
 『秦始皇兵馬俑坑 一號坑發掘報告 1974-1984』
 文物出版社、北京
 陝西省考古研究院 2020「陝西西安西咸新区石羊漢
 墓發掘簡報」『文博』2020 年第 6 期、陝西人民
 出版社、西安
 陝西省考古研究院・楊凌區文物管理所 2018『郿城
 漢墓』上海古籍出版社、上海
 四川大學考古文博學院・成都文物考古研究所 2024
 「成都市高新區貴家官山 M 8 和李家山 M9 的發
 掘」『考古』2024 年第 1 期、考古雜誌社、北京
 蘇文錦 1964「山東梁山柏木山的一座東漢墓」『考古』
 1964 年第 9 期、「考古」雜誌社、北京
 孫機 1985「玉具劍與璣式佩劍法」『考古』1985 年第
 1 期、科學出版社、北京
 孫機 1997『漢代物質文化資料圖說』文物出版社、
 北京
 王永波 2005『長清西漢濟北王陵』三連書店、北京
 西安市文物保護考古所 2004『西安南郊秦墓』陝西
 人民出版社、西安
 西安市文物保護考古所 2009「西安南郊荆寺二村西
 漢墓發掘簡報」『考古與文物』《考古與文物》編
 集部、西安
 西安市文物保護研究所・程林泉・張翔宇・張小麗・
 王久剛編著 2009『西安東漢墓』文物出版社、
 北京
 西安市文物保護研究所・鄭州大學考古專業・程林泉・
 韓國河・張翔宇編著 2004『長安漢墓』陝西人
 民出版社、北京
 廈門大學歷史與文化遺產學院・福建省考古研究院・
 南平市文物保護中心・浦城縣博物館 2022「福
 建浦城龍頭山遺址秦漢時期墓葬」『考古』2022
 年第 9 期、考古雜誌社、北京
 許昌市文物工作隊 2010「河南禹州市新峰墓地 M10、
 M16 發掘簡報」『考古』2010 年第 9 期、考古雜
 誌社、北京
 徐長清主編 2024『海昏侯墓出土文物研究』科學出
 版社、北京
 徐州博物館 1993「徐州後樓山西漢墓發掘報告」『文
 物』1993 年第 4 期、北京
 徐州博物館 1997「徐州西漢宛朐侯劉執墓」『文物』
 1997 年第 2 期、文物出版社、北京
 徐州市博物館 2009「江蘇徐州市大孤山二號漢墓」『考
 古』2009 年第 4 期、考古雜誌社、北京
 徐州博物館 2010「徐州拖竜山五座西漢墓的發掘」『考
 古學報』2010 年第 1 期、考古雜誌社、北京
 揚州博物館 1991「江蘇邗江縣甘泉老虎墩漢墓」『文
 物』1991 年第 10 期、文物出版社、北京

- 揚州博物館 1988「江蘇邗江姚莊 101 号西漢墓」『文物』
1988 年第 2 期、文物出版社、北京
- 揚州博物館 2000「江蘇邗江渠姚莊 102 号漢墓」『考古』
2000 年第 4 期、考古雜誌社、北京
- 沂水県文物管理站 1985「山東沂水県荆山漢墓」『文物』
1985 年第 5 期、文物出版社、北京
- 盱眙県博物館 2004「江蘇東陽小雲山一號漢墓」『文物』
2004 年第 5 期、文物出版社、北京
- 鎮江博物館 1984「鎮江東吳西晉墓」『文物』1984 年
第 6 期、文物出版社、北京
- 中国国家博物館・徐州博物館編 2005『大漢楚王 徐
州西漢楚王陵墓文物集粹』中国社会科学出版社・
北京
- 中国科学院考古研究所編著 1957『長沙發掘報告』
科学出版社、北京
- 中国科学院考古研究所編著 1959a『洛陽中州路』科
学出版社、北京
- 中国科学院考古研究所編著 1959b『洛陽燒溝漢墓』
科学出版社、北京
- 中国科学院考古研究所洛陽發掘隊 1963「洛陽西郊
漢墓發掘報告」『考古學報』1963 年第 2 期、文
物出版社、北京
- 中国社会科学院考古所唐城隊 1991「西安北郊漢墓
發掘報告」『考古學報』1991 年第 2 期、考古雜
誌社、北京
- 中国社会科学院考古研究所編著 1980『滿城漢墓發
掘報告』文物出版社、北京
- 中国社会科学院考古研究所編著 1994『陝東周秦
漢墓』科学出版社、北京
- 中国社会科学院考古研究所・広州市文物管理委員会・
広州市博物館編 1981『広州漢墓』文物出版社、
北京

【その他】

- Gonthier, E., Kostov, R., Strack, E. 2014 A Han-dated
'Hydra'-type Nephrite Scabbard Slide Found in
Chatalka (Bulgaria) : the Earliest and Most Distant
Example of Chinese Nephrite Distribution in
Europe// *ArkeoLog* No. 65 (https://www.academia.edu/9234763/A_Han_dated_hydra_type_nephrite_scabbard_slide_found_in_Chatalka_Bulgaria_the_earliest_and_most_distant_example_of_Chinese_nephrite_distribution_in_Europe、2026.01.19 最終
閲覧)
- Le Trung 1966 *Nhung ngoi mo tang thoi thuoc han o thieu duong*// *Mot So Bao Cao Ve Khao Co Hoc Viet Nam: Doi khao co xuat ban nam*, Ha Noi
- Rostovcev, M. M. 1930 *Le porte-épée des Iraniens et des Chinois// L'art byzantin chez les Slaves. Les Balkans. Premier recueil dédié à la mémoire de Théodore Uspenskij. Première partie*: P. Geuthner, Paris
- Trousdale, W. 1975 *The Long Sword and Scabbard Slide in Asia*: Smithsonian Institute Press, City of Washington
- Мижиддорж, Э. эрхэлсэн 2021 Хүннүгийн язгууртны булшны судалгаа (Балгасын Тал дахь Гол Мод-2) : “Мөнхийн Үсэг” хэвлэлийн компани, Улаанбаатар

《図版出典》

図1・2：筆者作成、図3～7・図8-2～4：表1・2参照、図8-1：山東省文物考古研究所編著 2020、図9：河南省文物考古研究院・洛陽市文物考古研究院・蒙古国烏蘭巴托大学考古系編著 2020、表1～7：参考文献より筆者作成

A Chronological Study of Chinese Jade Scabbard Slides (*Wei*)

Kosuke Sakagawa*

This paper aims at analyzing changing process of Chinese scabbard slides called “*wei* (璚)”, through reviewing Trousdale’s study, which had deep influence on studies of ancient swords around the Eurasian Continent with an overwhelming number of examples published before the number of archaeological excavations rapidly increased in China.

Wei themselves emerged around the Late Spring and Autumn Period and became basic sword equipment in the Han Dynasty, and in addition, their usage influenced that of the other parts of the Continent around the end of the 1st millennium BC. *Wei* are important artifacts in considering cultural interactions of the areas, but systematic studies about *wei* are few after Trousdale’s study, although the situation of the study dramatically changed.

This study tries to make a data base of *wei* reported by archaeological excavations in China and reviewed Trousdale’s typology and chronology based on that. This study focuses on *wei*’s side shapes, classifies them especially based on their short hook at one end, and checks their changing process by analyzing their long hook at the other end. Similarly, this paper considers changing process of *Wei*’s decorations based on that of shapes.

As a result, this study concludes that almost all *Wei*’s shapes rapidly derived by the era of *Wu Di* (武帝) at first, and variation of their decorations drastically changed after the era of *Zhao Di* (昭帝) after that, and finished the changing process at the end of the Western Han Dynasty. The people continued using *wei*, but both shapes and decorations hardly changed after the Xin Dynasty.

In addition, this paper considers reusing old *wei*’s. It was possible that some old *wei*’s were picked up and added a new decoration or used in another way, but such examples are not so many and the span until reusing were probably not so long.

*Shimane University

横浜ユーラシア文化館紀要 第13号

Bulletin of the Yokohama Museum of EurAsian Cultures No. 13

2026年3月31日発行

編集 横浜ユーラシア文化館
〒231-0021 横浜市中区日本大通12
Tel.045-663-2424 Fax.045-663-2453
<https://eurasia.yokohama-history.org>
発行 公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団
印刷制作 株式会社TAKT-JAPAN

Edited by the Yokohama Museum of EurAsian Cultures
12 Nihon-odori, Naka-ku, Yokohama, Japan
Published by the Yokohama Historical Foundation
Printed in Japan by TAKT-JAPAN, CO., LTD

ISSN 2758-6332